者ハ左ノ通無能力者
一 未丁年者タル
二 妻タル者
三 白痴瘋癲人
四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
法律ニ定メタル代人
一 未丁年者ノ父母又ハ若クハ親屬後見人タル
二 夫タル者
三 白痴瘋癲ノ保管者
四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
民事訴訟人
一 未丁年者ノ父母又ハ若クハ
二 白痴瘋癲人ノ保管者
三 雇主共ノ命令ヲ行フ事
四 但雇主タル時

參考スルノ一助ニ供スルノミ其言ハ以テ十分ノ勢力アル者ニ非ズ故ニ證人トナルヲ許サス

知覺 シリサトル

精神 タマシヒ 不充分 ミタヌ 瘖啞者 ワシ 公權 日本人民一般ニ固有スル權利

剝奪 ハギトル

現ニ陳述云々 此事件ニ付曾テ訴ヘラレタル處其ノ證迹判然タラサル故免訴セラレ猶關係アルモノ

穩婆 トリアゲバヽ 秘密事件 ナイショノコト 委託 マカス 事實發見 コト ワミダス 陳述確實云々 証人ノ陳述スル事ガ犯所ニ關係シ其陳述ヲ確實ナラシメンガ爲メ重罪又ハ輕罪ノ犯所又ハ其外ノ場所等ヘ豫審判事ガ同行センヲワサイソクスル事ハ同行スヘシ

第百五十六條云々 該二條ハ被告人ト對質人ガ聾者啞者ナルカ又

三民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歲未滿ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者

三瘖啞者

四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免許ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十二條ニ

從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辨護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト格別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲヲ得

若シ證人同行スルヲ肯セザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ就テモ亦之ヲ適用ス

ハ外國人ナル時ハ通事ヲ用フル規則ナレ𪜈亦証人ノ聾唖外國人ナル時ニ用ルヲ得聾唖者ハ証人ナルヲ得ザレ𪜈通事アレハ之ヲ許ス

第百八十七條　皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條　書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヿ又ハ爲サヽル事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條　豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更增減センヿヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヿ能ハザル時ハ其旨附記ス可シ

第百九十條　證人ハ卽時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヿヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルヿヲ得

生業ナリハヒ

鑑定　犯罪ノ種類ニヨリ豫審判事ノ之ヲ査定スル能ハザル所ハ其ノ專業ニ習熟シタル者ニ鑑定ヲ爲サシムルヲ得

學術職業云々　人ヲ殺セシニ藥ヲ以テセシト思料スレハ醫師之ヲ鑑定シ又ハ土藏ヲ切リ破リテ入リシニ刃物ヲ以テセシカト思料スレハ職人之ヲ鑑定スルノ類ナリ

性質方法　拘引狀ヲ發スル若シ鑑定人ヲ得ス

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節　鑑定

第百九十一條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニヨリ鑑定スルヿヲ得可キ者一名又ハ數名ヲメ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條　鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヿ及ヒ呼出ニ應セザル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヿヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但拘引狀ヲ發スルヿヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條　鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

呼出ニ應セサルトキハ第百七十六條ノ規則ノ如ク罰金ヲ言渡ス然レ𪜈勾引狀ヲ發スルヿ能ハス何トナレハ鑑定人ハ證人ノ如ク必ラス其人ニ限ルニ非ス其事柄ニ適當ナル職能アル者ナレハ固ヨリ其何人タルヲ問ハサル爲メナリ

急遽イソグ參考マジヘカンガヘル結果ケツクワ鑑定ノ上得タル發見物ヲ云ナリ即毒殺事件ニ付テハ胃腑中ニ毒物ノ正跡ヲ含有スルヤ否ヤ鑑傷事件ニ付テハ其傷果シテ致命ノ起因タルヤ否等是ナリ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヿヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條　鑑定人宣誓ヲ肯セズ又ハ宣誓ノ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但シ言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ

第百九十五條　第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヿヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヿヲ得

第百九十六條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヿヲ得

第百九十八條　鑑定人ノ鑑定書ヲ作リ其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

結果ヲ得サル時死骸腐敗シテ其毒殺ナルヤ否ヤヲ知ル能ハサルノ類

契印ワリインヲ命令書中付タル書類

現行犯ノ豫審現行非現行犯ノ豫審共ニ治罪ノ手續ニ於テ差異アル可カラサレ𪜈只タ現行犯ハ其ノ急選ヲ要スル事件タルヘキニ付官吏ガ非常ノ權限ヲ以テ取扱ノ異ナルノミ非常ノ權限ハ犯罪人逃

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置クヘシ

第二百條　鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與スベシ

第八節　現行犯ノ豫審

豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヿヲ得

亡シ又ハ逃走セザルモ罪證犯迹ノ消滅センヿヲ恐レ實地ニ付キ調査ヲ爲スヲ云フヘシ

檢事ノ職務ハ罪犯ノ起ラサルモ訴ノ起ラサルモノナル可レモ前條ノ場合ト雖モ豫審判事ニシテ檢証調書ヲ作リタラハ其調書ヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノト看做スベキナリ

罰金ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

檢事ノ職務ハ罪犯ノ事情ヲ告訴シ求刑スルモノナレモ現行犯ノ重輕罪ナル場合ニ於テハ檢事ニ先シテ豫審判事之ヲ爲シ是レハ豫審判事ニ先シテ檢事之ヲ爲サスサレモ檢事職トシテ罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得ス如何トナレハ裁判ノ性質ニシテ判事名稱ナキ者ノ爲シ得ヘカラサル所ナレハナリ

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ所分ヲ爲スヿヲ得

第二百二條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス

其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヿヲ記載スベシ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致スヘシ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非ザルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條　檢事ハ豫審判事ヨリ先キ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヿナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヿヲ得罰金ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヿナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條　前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添速ニ之ヲ豫審判事ニ送致スヘシ

第二百五條　第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

第二百六條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リ拘留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致スヘシ

若シ起訴ヲ爲スヘカラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免スヘシ

第二百七條　豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問スヘシ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル拘留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

第二百八條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヿヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置クヘシ

第二百九條　檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ拘留狀

明治十四年第四十九號布告第二百廿日

治罪法第一項但書五條ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヿヲ得サル時ハ檢事ニ先シテ豫審判事ニ令狀ヲ發スルヿヲ得ス

明治十五年十月十三日政布第十五號布告

治罪法第二編第二十二條ニ檢事ハ犯罪ノ情況ヲ以テ可レモ現行犯ノ重輕罪ナル場合ニ於テハ檢事ニ先シテ豫審判事ニ之ヲ送致スヘシ

第二百五條　第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

第二百六條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リ拘留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致スヘシ

若シ起訴ヲ爲スヘカラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免スヘシ

第二百七條　豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問スヘシ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル拘留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

第二百八條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヿヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置クヘシ

第二百九條　檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ拘留狀

内ニ於テスルコトヲ得ル明治十六年丙申第一八號保釋賣付取締方ノ件法省達

被告人ノ心得ノ儀ニ付テハ左ノ通各裁判所ヘ相達候間此段心得相達候事

第三十一號

保釋賣付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締ヲ服從セシムヘキ旨ヲ付保ス可キ儀ニ付テハ釋放ノ際其旨ヲ豫メ被告人ニ知セシム可シ但其旨ヲ記載シタル紙尾ノ印刷ヲ妨ケナシ

保釋刑ノ言渡決定マデハ被告人ノ請求ニ因リ保證金ヲ納メテ勾留收監ヲ釋キ家ニ歸ラシム是レ未ダ純粹ノ無罪人ナレハナリ

無能力幼年白痴瘋癲等ヲ云

ヲ被シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及スト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヘシ

第九節　保釋

第二百十條　豫審判事ハ豫審中拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出シニ應シ出廷スヘキノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヘシ

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百十一條　前條ノ證書ハ書記局ニ差出スヘシ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲スヘシ

第二百十二條　保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシムヘシ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

貯金預所云々

保證金ハ正貨又ハ貯金預所ノ預證書又ハ銀行ノ預證書ヲ以テスルヿヲ許スト雖ト人民相互ノ貸借證書ヲ以テスルヿハ許サヾルナリ之レ保證金沒入ノ時ニ急速ヲ要セサルヲ以テノ故ナリ

沒入スヘシ

呼出ニ應セサルニ疾病事變正當ノ事由ナクンバ其ノ保證金ノ金額又ハ何分ヲ豫審判事ノ言渡ニテトリアグル他人ノ保證云々

他人ヨリ保證ヲ入レシ

第二百十三條　保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地內ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヿヲ得

第二百十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入スヘシ

第二百十五條　保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲スヘシ

若他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヿヲ必要ナリトスル時ハ檢

モノ没入ノ時ニ金圓ヲ納メサル時ハ民事ノ裁判所ニ訴ヘ出テ請求ヲ爲スナリ

保證金ヲ没入云々 被告人カ無罪免訴ノ言渡ヲ受ケタルトキハ豫審判事ノ誤失ニシテ此場合ニ於テハ前ニ没入シタル保證金ハ之ヲ還與セザルヲ得ス

責付 被告人ヲ親屬又ハ故舊ノ責ニ任セシムル

明治十四年九月廿日第四十七號布告第一條 被告人ヲ責付スルハ親屬又ハ故舊ノ責付シ監督ノ責ニ交付シ監督ノ責ニ任セシムル

豫審終結 豫審判事ノ取調ガオハリタル場合 其管轄ニ非ストシ云々 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストナス即チ其ノ被告ハ皇族勅任官ニテアリタルトキ又犯所ガ我管轄内ニアラザルトキ或ハ取調ヲ了リテ他ニ關係シタルヿヲ思考シタル時ハ之ヲ以テ其事件ノ豫審ヲ終リタリトス

豫審判事ハ檢事ノ意見云々 本條ニ於テハ檢事ハ第二百四十六條ニ定ムル如ク豫審終結ニ對シテハ故障ヲ爲スヿヲ得サル也

事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付スヘシ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消タル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又故舊ニ責付スルコトヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヿナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付スヘシ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヿヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヿヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ拘留ヲ要スル時ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

出サシムヘシ

第二條中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人ヲ呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

責付ニ非ストシ

一 裁判所ニ於テ推測ヲ以テ罰スルヿヲ得サレハナリ

二 現ニ道德ヲ破リタル罪ハ犯スト雖ヒ觀聽相鑒ムカ如ク法律上ニ於テ罪トナラズ

三 公訴既ニ消滅シタル場合

五 罪惡一洗シタルトキ

六 刑法第一編第四章第七十五條第八十條第三百十四條第三百十五條ノ場合ヲ云フ

釋放 放免ト異ナリテ罪

一犯罪ノ證憑充分ナラサル時

二被告事件罪ト爲ラサル時

三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四確定裁判ヲ經タル時

五大赦アリタル時

六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

ノ間フベキアルモカロキ故法律上其自由ヲ停止スルヿヲ許サヽルニ因リ其勾留ヲ解クヲ云

言渡ヲ取消ス 重罪被告人ハ保釋又ハ責付ヲ爲ス可カラズ故ニ豫審中保釋又ハ責付セシモノト雖ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルトキハ保釋又ハ責付ヲ取消スモノスト

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヿヲ得

若シ被告人未ダ拘留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヿヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヿヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヿ公訴受理ス可カラサルヿ及其原由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ

性質ナリ　摸タチ
樣罪ノナシタ正條
何條ニ適當スルト云フ
逃捕スルヿ
能ハザル場
合　勾留狀ヲ發スルモコレヲ逮捕スルヿ能ハサルカ又ハ勾留シタル者逃亡シタル時タリ
豫審ヲ停止スルヿナク證人ヲ訊問シ犯所ニ臨檢スル等ノ處分ヲナシ其ノ來被告人禁錮以上ノ刑ニ該ルト思料シテ之ヲ重罪裁判所又ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケタル場合ニハ其ノ旨ヲ明ニ記シテ他日ノ異議ヲ防グベシ

簡略ナル　豫審上訴　豫審裁判ニ付キ故障ヲ會議局ニ訴フルヿ方法順序ヲ示ス

一　豫審判事ノ管轄ニ非サルノ申立ヲナスモ判事之レヲ棄却シテ省ミザル時

二　被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヿ可キ時ニ非スシテ勾留狀ヲ發シ若シハ此令狀ヲ發シタル日ヨリ十日ヲ過クルモ被告人ヲ責付スルヿナクシテ收監狀等ヲ發セサル時ヲ云ナリ

三　被告人ノ請求ヲ待タス

第二百三十一條　前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ重罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條　前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條　書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十一條　被告人ヲ逮捕スルヿ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ拘留ヲ受クルニ非レハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百三十二條　前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財產ヲ差押可キヿヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條　豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ遠ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告スヘシ又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出スヘシ

第四章　豫審上訴

第二百三十四條　左ノ場合ニ於テ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得

一　管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二　法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三　法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サヽル時

四　越權ノ處分ナル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲナスコトヲ得

シテ保釋ヲナシ檢事ノ意見ヲ聽カスシテ責付ヲナシ若クハ保釋責付ヲ爲スベキ時之ヲ爲サヽル場合

四　豫審判事其權限ヲ超越シテワガマヽノ處分ヲナシタル場合

會議局ノ言渡云々　會議局ノ言渡ニ對シテハ之ヲ上告スルヲ得ル

ト雖モ豫審終結ノ言渡ヲ待ツ所以ハ假令ヒ會議局ノ決定如何ナルモ豫審ハ一切之ニ關セサルモ

第二百三十五條　故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出スヘシ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日內ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條　故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決スヘシ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スヿヲ得

第二百三十七條　左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマデ豫審判事ヲ忌避スルヿヲ得

一豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

ナレハ豫審ノ裁判却テ被告ヲシテ滿足セシムルアルモ知ル可カラス是其終結ノ言渡ヲ終リテ後上告スル所以ナリ

忌避　犯罪者豫審判事ノ親屬ナル故我ニ利ナシ必ス幾分カ一方ノ利ヲ計ルト思フヿハ之ヲサケテ外ノ判事ヲ指ニ願フヿヲ採用セヌヿ

棄却　棄却ニ付故障ヲ爲スヿヲ得ルモ忌避ノ認可ヲ得タルヿ對手人ヨリ上訴スルヿハ許サヽル也

會議局ニ於テ故障云々

棄却ニ付故障ヲ爲スヿヲ得ルモ忌避ノ認可ヲ得タルヿ對手人ヨリ上訴スルヿハ許サヽル也

二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條　忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時內ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヿヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達スヘシ

第二百三十九條　豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヿヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條　豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申

豫審ノ手續ヲ繼續 忌避ノ申立アリタルカ又ハ其故障アリタルカ又ハ豫審判事ハ豫審ノ手續ヲ繼續スベシ

忌避ニ付故障ヲ棄却 忌避スヘキ理由アルヲ知リ又ハ嫌疑アリテ回避スヘキ者ト思料シタルトキハ假令其申立ナキモ豫審判事自ラ回避ノ申立ヲ會議局ニ爲スベシ

回避 豫審判事自ヲ其掛リヲ還慮スルコト 許否 ユルストユルサヽルモ何レモ判決スヽ

立ヲ棄却シタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

又タ急速ヲ要セザル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヿヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テハ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヿヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヿヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖トモ更ニ取調ヲ爲

スコトヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヿヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヿヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヿヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得ス

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

被告人ハ重罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫

豫審終結ノ言渡云々 第一ハ管轄違ノ言渡 第二免訴ノ言渡 第三重罪裁判所ニ移スノ言渡 第四輕罪裁判所ニ移スノ言渡 第五違警罪裁判所ニ移スノ言渡ナリ

被告人ハ重罪裁判所云々 被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡アルトキハ自ラ其ノ犯スト所輕罪ナリト信スル場合ハ故障ヲ爲スヘシ而シテ被告人ハ自己ノ利害ニ關スルノ外ハ故障ヲ爲

スヲ許サヽルナリ

故障ノ期限　書記局ヨリ言渡書ヲ送達シタルヨリ一日ノ内ニ其申渡シヲナスコトヽス左レ𪜈趣意書ハ到底一日ノ間ニ認メ得ル可キモノニアラザレハ次條ノ例ニ從フモノトス

附帶ノ故障　他ノ一方ノ者終結ノ言渡ニ服セスシテ故障ヲナシタルニ因リ已モ亦之ニ附帶シテ不服ノ條件ヲ申立ルヲイフ是レ即チ主タル故障ニ對スルノ謂ナリ

審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十七條　故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條　檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

第二百四十九條　故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヿヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

第二百五十條　豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ拘留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條　書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條　會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ拘留スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條　會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルヿヲ發見シタル時ハ職權ヲ以

執行ヲ停止ス　故障ノ判決ヲ會議局ニ請求スルノ場合ニ於テハ豫審終結ヲ停止セザルヲ得ス故ハ其判決ニヨリ豫審ノ目的相變更スルアレハ

第二百三十六條ノ規則　故障ヲ會議局ニテ判決シ豫審判事ノ言渡正當ニシテ故障ヲ理ナシトスルトキハ原言渡ヲ認可スルノ言渡ヲナスナリ其ノ内或ハ終結ノ言渡ノ全部又幾分カヲ採用スヘキ所アリテ之ヲ用ヒ彼レヲ捨ツルニ於テモ全

部ノ言渡ヲ更ニ爲ス可シ是レ乃チ失誤ナカラシメンガタメナリ

會議局ニ於テ故障取調

裁判所ハ起訴ナキヲ判決スルモノニ非ス本條ノ如キ一罪犯ニ因リ他ノ罪犯アルヿヲ知ル場合ニ於テハ之ヲ坐視スヘカラス況ヤ一罪共犯異地共犯等ノ者ヲ偏刑シテ足ルベキニ非ス故ニ此變例ヲ設クルモノナリ

上訴法律ハ被告人ヲ保護スル者多シ是レ間々寃枉アルヲ以テナリ本條亦其一ニシテ上訴シ得ヘキ事ヲ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヿヲ得

第二百五十五條　會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヿヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條　故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條　檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第二百五十八條　被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上

明治十五年五月司法省丙第十八號

治罪法第二百六十條ノ場合ニ於テ重罪裁判ノ被告人ニ關スル書類ハ檢事ヲ經テ其監倉ノ長ニ移ス時ハ令狀ニ檢事ノ命令ヲ添テ送致シ其書類ハ官吏ニ交付シ其監倉ノ長ニ人ヲ被告人ニ移ス可シ

上訴期限ヲモ記入ス其記入無キ時ハ言渡書無効ニ屬シ更ニ規則ヲ踏ミタル送達書アル迄上訴シ得ヘキモノトス

罪名ノ變更

謀殺ヲ故殺トナシ際罪ヲ詐欺取財トナスモ此ノ改革ニ付キ再訴ヲ受クルノ原由ヲ生セス然レ𪜈別ニ新証アリタルハ訴ヲ起サス

訴ノ權ヲ失フヿナカル可シ

第二百五十九條　第三百十一條ヨリ第三百十三條マデノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送達ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルヿナカル可シ但新ナル證憑アル時ハ此限ニ在ラズ新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

明治十八年九月太政官第三十九號布告
明治十四年十一月第四十九號布告
十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通判定ス

（別紙）

第一條　警察官長及ヒ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ニ代ヒ即決ス

第二條　即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒスヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第三條　即決ニ得ヘカラサル時ハ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトヲ得若シ出廷シテ辯論スル時ハ直チニ其言渡書ヲ其住所又ハ本人ニ送達スルコトヲ得

第四條　即決ニ得ヘカラサル時ハ直チニ上訴ヲ爲スコト

公判ハ衆人ノ傍聽ヲ許シ公ケニ裁判ヲナス者ナリ

本篇ニ於テハ重罪輕罪違警罪ニ裁判所ニ於テ豫審終結ノ言渡ニ因リ或ハ豫審ナクシテ直チニ起訴アリタルニ因リ又ハ上等ナル裁判所ノ判決ニ依リ之ヲ移サレタルニ因リ之ヲ管掌スルヿヲ定ム

登記ノス　減縮チメル　重要ナル事由　訴訟關係人ノ不在若クハ疾病ニ因リ出廷シ難キ事由ノ証明アルトキハ或ハ犯罪ノ証據不充分ナル爲メ公判ノ期日ヲ延引スル等是レナリ

公安ヲ害シ　國事犯ノ如キ其訊問ヲ傍聽セシメ爲ニ人心ヲ激動ナサシム　猥褻ミダラナル　拘束細クサリ等ニテクハル　對審コトナシ　双方辯論ヲ盡シタルモノト見ナス　辯護人申立ノマチガヒナキ爲メ或ハ充分ニ我情狀ヲ行フヿノデキヌ時ニ間ヒ合セ又ハ代テ行ハシムル　選任エラミイヒツケル　暴行アバレル　喧噪ヤカマシク

第四編　公判

第一章　通則

第二百六十二條　訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付スヘシ

裁判所長ハ未決拘留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヿヲ得

第二百六十三條　重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第二百六十四條　被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ渉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヿヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許スヘシ

第二百六十五條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヿナシ但守卒ヲ置クヿアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルヿヲ得若シ出廷シテ辯論スルヿヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條　被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ルヿヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スヿヲ得

第二百六十七條　被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ拘留スルヿヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ
第五條　正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ塲合ニ於テハ言渡アリタル日ヨリ三日内第二項ノ塲合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタル日ヨリ五日内トス
第六條　警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時

妨礙（サマタゲ）　告戒（シヅカニセヨトイマシム）　痊癒（ヤマヒナヲル）

第二百六十八條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヿ能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス
辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲スヘシ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終タル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヿナク裁判言渡ヲナス可シ
第二百六十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カラス
豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヿ能ハサル塲合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親

内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ
第七條　第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス
第八條　科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル塲合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得
第九條　科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ
若シ納メサル者ハ壹圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ

辯護人ヲ用フルヿヲ許サス　已ムヲ得サルノ缺席ヲ除ク外ハ被告人ガ自ラ辯護ノ權ヲ拋棄スルモノナリ故ニ闕席シ乍ラ名代人ヲ用ヒテ辯護セシムルヿヲ許サス
裁判ヲ延期スルヿヲ得　裁判所ニ於テ其ノ被告人ガ出廷シ難キ理由ヲ以テ至當ナリトスル片ハ判事ハ檢察官ノ意見ヲ聞キ符合スル片ハ裁判ヲ延ハス
諸般（モロヽヽ）　處置（ハカラヒ）

屬若クハ戸長ニ送達ス可シ
第二百七十條　闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルヿヲ許サス但其親屬故舊ハ被告ノ出廷スルヿ能ハサルノ事由ヲ證明スルヿヲ得
裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得
第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタルモノニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲スヘシ
第二百七十二條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲナスヘシ
稱贊誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得
第二百七十三條　公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取

留置スル其一回ニ滯サルモ仍著ト雖ホ一日算スニ到

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其一圓ニ相當ル刑期ニ相當ル金額ヲ保證ノ差出サシムヘシ

第五條 裁判所ニ於テ前條ノ罪ヲ犯ス者アルトキハ直ニ控訴セラレ又裁判ヲナスヘシ若シ其犯罪輕罪ニ該ルモノナレハ控訴セラルヘキ裁判ヲナスヘシ

第十一條 刑期ニ期限ヲ定メタル拘留ノ言渡ヲ爲シタル者アル時ハ裁判所ニ之ヲ開キ五名ノ判事ヲ以テ決斷スル所ノ刑ノ言渡ヲ確定シタル者ハ直チニ出廷シ其執行ヲ受ケシメ若シ出廷ヲ拒ムトキハ直チニ出廷ヲ命シ其日數ヲ拘留ノ日數ニ算入ス

第十二條 留置シタル者ハ直チニ裁判所ニ送致シ正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ヘ出廷ヲ命シ其日數ヲ拘留ノ日數ニ算入ス

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ壹圓ニ折算シテ料料ノ金額又ハ留置ノ日數ニ算入ス

第十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲナシ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲シ其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲スヘシ

第十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スルタメ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲナスヘシ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ裁判ヲナスヘカラス但辨論ニヨリ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷內ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラズ

稱贊ル 誹謗ワルク身分イフ ノ如何ニ拘ラス 高等法院又ハ軍事裁判所ニ屬スルモノトイヘトモ違警罪裁判所云々 違警罪裁判所ニ於テ前條ノ罪ヲ犯ス者アルトキハ直ニ控訴セラレ又裁判ヲナスヘシ 通常ノ規則云々 通帶ノ手續ヲ以テ之ヲ裁判スル其尤モ裁判官ノ粗漏ニスヘカラサル

押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲スヘシ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ルヘシ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲナシ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲シ其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲スヘシ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スルタメ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲナスヘシ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ裁判ヲナスヘカラス但辨論ニヨリ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷內ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラズ

換シテ水刑ニ

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサルノ申立ヲ爲スヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及書記ニ對シ忌避ノ申立ヲナスヿヲ得

審豫ヲナシタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲モノニシテ其裁判所ニ之ヲ開キ五名ノ判事ヲ以テ決斷スル所ノ者ナレハナリ

附帶ノ事件 豫審判事取調ヘタル口供ニ因リテ公判ニ掛リタル際以外ノ罪犯發スルヲ云

擔當 ヒキウケ

棄却ステ

忌避ノ申立 大審院ノ裁判官ハ之ヲ忌避スルヿヲ得

干預 事件ニタチイル

明治十八年十二月司法省丙第十號達明治十五年三月當省內第十三號ヲ以テ達セル罪裁判言渡書ノ謄本ハ其抜書ヲ附スヲ可キ費用ハ當ヲ分徵收スヲサル旨相達置候處本年九月第三十一號ヲ以テ達セル罪裁判ノ例ニ公布相

回避 豫審判事自ラ遠慮スルヲ云

以後ノ手續

前ニ停止シタル續キノ着手ナリ

變災厄難裁判

官被告人又ハ其辯護人ガ變災厄難ニカヽル時

職權ヤク管轄官吏ノ作リタル調書

此等ノ書類ハ已ニ實際ニ取リ紛シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時同亦シ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲナスヿヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條　忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條迄ニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ルヘシ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲナスヘシ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フヘキ證據ハ豫審ニ於テ用フヘキ證據ニ同シ

第二百八十四條　裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効ヲ有ス

第二百八十五條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼出スヿヲ得

第二百八十六條　豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サヽル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キトキハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヿヲ得

成候ニ付テハ自今該裁判ノ正式ニ係ルモノハ該費用ヲ其卽決ノ徵收シ前ノ通取計ハヽ從ニ係ルモノハ徵收ス可カラサル旨相達シ此旨相達候ヘシ

遵候事

明治十五年三月廿二日司法省丙第十號達

八十條第二百八十條第二百八十一條ニ從ヒ

治罪法第二百八十條ヲ以テ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出シ

局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宜ハシ

塩ニ臨檢シテ調書ヲ作リタルモノナレハ其ノ申立ニ付キ說明ヲ要スル時ハ證人トナリテ出廷セサルヲ得ス

書記ノ次席ニ及ハシ付テ陳述スヘシ此旨相達候

シ又ハ原被ノ陳述書ヲ朗讀シタルヲ記シ各自署名捺印シタルモノナレハ原被又ハ證人ノ陳述スルモノト同一ノ効ヲ有スヘシ

調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼出スヿヲ得

檢證書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

錄取カキトル比較クラベル

言語ヲ云々　陳述ノ前ニ辯論ニ立會ハシムルトキハ甲乙自然罪犯ヲカクスノ恐ナキニ非サルユエ陳述後ニ辯論ニ立會ハシメ又互ニ言語ヲ交ユルトキハ事實ヲ曲グルノ恐レアルベキユヘ之ヲ禁ジラレタリ

證人數名アル時ハ檢察官ノ證人數人アルトキ又ハ民事原告人ノ證人數名アルトキ被告人ノ證人數人アル時ヲ云フモノニシテ是等ノ證人ヲ合シテ數人アル時ヲ云ニ非ス

第二百八十七條　第二百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一　檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三　被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條　證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第二百九十一條　證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヿヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヿヲ得

證人ノ陳述不實云々　刑法第二百二十八條第二百二十八條ハ證人タルモノ被告人ヲ害ニオチイラシムル爲メ事實ヲカクシ僞證ヲ爲シ又ハ被告人ヲ曲庇スル爲メ僞證ヲナシタル場合ノ罪ヲ論ス本條ハ即チ是等ノ現行犯ヲ發見シタル時ノ手續ヲ示ス

故意ヲ以テ　故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ拘引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ」

思料　オモヒハカル

應セサル　令狀ヲウケズ

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヿヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條　證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ拘引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヿヲ得

第二百九十三條　證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ卽時檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一　違警罪事件ニ付テハ五十錢以上壹圓九十五錢以下ノ科料

即時スグサマ

正當アタリマヘ

閉廳ヤクシヨワシメル

職權ヤクメノケンリ

二輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條　本條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヿ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條　證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サヽル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

拘引狀ヲ發スヘシ　公判ヲ延期シタル再度ノ期日ハ之ヲ勾引シテ必ス出廷セシムルナリ　新ニ命シタル豫審ニテ命シタル鑑定人ヲ公判ニ付キ更ニ用フルトキハ其ノ性質證人ト異ナラスシテ豫審ニテ鑑定シタル所ヲ說明シ解釋スルモノナレハ證人ニ付テノ規則ト同シク取扱フトス

鑑定品物ノ直段ノメキハスル

第二百九十六條　證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ拘引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條　第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人モ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ

第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ說明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條　被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條　被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム

其順序ヲ變更スルヲ得

裁判上席人ハ法廷ヲトヽノヘ順序ヲ正スノ任アリ而シテ其順序ノ一定シタル上ハミダリニ之ヲ改ム可ラスト雖モ若シ事實ノ發言ニ付キ前後ヲクリカヘルヿヲ得シト欲スルニ於テハ之ヲ改ムルヿヲ得

發言ダス妨礙サマタゲ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

檢察官ニ於テ半途ニシテ其訴件ヲ拋棄シ復タ公判ヲ即ガサルニ至ルト雖モ裁判所ニ於テハ其儘之ヲ棄却セス相當ノ裁判ヲ爲シ之ヲ言渡ス可シ

明治十五年七月司法省丙第二十六號達第三百公訴ニ於テハ擔當人ニ代リ辯護ヲ爲スヿヲ得ス

治罪法第二項官擔當人ハ費用ハ裁判所ヨリ該金額ヲ支拂フヿヲ得

異議ノ申立

證據差出ノ許否若クハ順序又ハ證人訊問ノ次第ニ付キ異議ヲ申立ルナリ

民事擔當人被害者要償ノ訴ヲナシタル時被告人ニ代リ辯償スヘキ義務アリ

異議コトナルヿヲ得

可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第三百條　證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヿヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スヿヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條　檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條　辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三條　民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヿヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヿヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條　無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヿヲ明示ス可シ

判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタ

ル後其裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

第三百七條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ノ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當スヘシ

第三百八條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハズ沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條　本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條　禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非ザレバ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

被告人刑ノ言渡云々　裁判ハ公明正大ヲ以テ主トス故ニ刑ノ言渡及ヒ免訴ノ言渡ニハ細密漏スナク一讀了然タルヲ要ス故ニ事實ニ由テ其理ヲ明ニシ法律ニ依テ其適用ヲ示シ罪迹ノ證憑ヲ明示スヘシ

全部マタハ幾分　無罪ノ言渡アリタル場合　被告人辯護其効アリテ免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル時ハ公訴ノ入費ハ本人之ヲ出ス可キ理由ナキヲ以テ官ヨリ之ヲ出ス

敗訴　訴訟關係人云々　故障申立ノ期限ハ三日トシタルヲ以テ洪水地震等ノ爲ニハ之ヲ經過スルヿモアルヘシ故ニ一ノ法ヲ設ク之ヲ經過シタリ但其申立遺理アルニ於テハ其權利ヲ失フヿナシ

經過日ヲ經ルヿ　回復ギサル　對手ヒモドス　受理ウケツケル　通常ヒトヽ

第三百十一條　拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條　訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因失ヒタル權利ヲ回復スルヿヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條　書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

○裁判言渡ノ謄本費用（明治十四年十二月司法省甲第七號布達）

第三百十五條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ求ムルヿヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

干預（カンヨ）タチイル

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預（カンヨ）シタル檢察官ノ氏名（シメイ）ヲ記載（キサイ）ス可シ

謄本（トウホン）ウツシ

下附（カフ）サゲワタス

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作（ツク）リ書記（ショキ）ト共（トモ）ニ署名捺印ス可シ

第三百十四條　裁判言渡ハ辯論（ベンロン）ヲ終リタル後公廷（コウテイ）ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡ハ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴（コウソ）又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヿ及ヒ其期限（キゲン）ヲ告知（コクチ）シ又ハ其言渡ノ抜書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ割合ニ上納スヲ可トス此旨心得可キ旨布達候事（明治十五年三月司法省丙第十二號達）

告知（コクチ）シワセル

上訴ヲ受理（ジュリ）ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由（ゲンユウ）アルニ非（アラ）サレハ即時（ソクジ）ニ裁判執行（シッカウ）ヲ爲サシム可シ

第三百十六條　對審（タイシン）裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴（コウソ）又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヿ及ヒ其期限（キゲン）ヲ告知（コクチ）シ又ハ其言渡ニ對シ故障（コショウ）ヲ爲スヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載（キサイ）ス可シ

若シ其告知（コクチ）又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從（シタガ）ヒ其告知アルマテ上訴期限（ジャウソキゲン）ノ經過（ケイクワ）ヲ停止（テイシ）ス

第三百十七條　書記（ショキ）ハ各事件（カクジケン）ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切（イッサイ）ノ訴訟（ソショウ）手續ヲ記載ス可シ

一　裁判（サイバン）ヲ公行（コウカウ）シタルヿ又ハ傍聽（ボウチヤウ）ヲ禁（キン）スルノ言渡アリタルヿ及ヒ其事由

二　被告人（ヒコクニン）ノ訊問（ジンモン）及ヒ其陳述（ナンジュツ）

三　證人（センヒン）鑑定人（カンテイニン）ノ陳述（ナンジュツ）及ヒ宣誓（センセイ）ヲ爲シタルヿ若シ宣誓ヲ爲サヽル時ハ其事由

四　原被（ゲンヒ）ノ證據物件（ショウコブッケン）

五　辯論中異議（ベンロンチウイギ）ノ申立アリタルヿ後日（ゴニチ）ヲ期シテ申立ツ可キ事件（ジケン）ヲ申立タルヿ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟（ソショウ）關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六　辯論（ベンロン）ノ順序（ジュンジョ）及ヒ被告人（ヒコクニン）ヲシテ最終（サイシウ）ニ發言（ハッゲン）セシメタルヿ

上訴期限ノ經過ヲ停止ス

控訴（コウソ）上告（ジョウコク）ハ期限（キゲン）ヲ下付（カフ）スル日ヨリ數日（スウジツ）ニ限リ徵收（チウシウ）セサル樣取計ヘシ此旨相達候事（甲第七號布達）

最終（サイシウ）イチバン

同一ノ裁判官云々（同一ノ裁判官ナルト他ノ判事之レニ代リタルトヲ記入スルハ是其ノ判事ノ交代ニ因リ取調ノ手續ノ變更アラサリシヤヲ檢定スルニ供ス裁判官ノ交換ハ大關係アルモノナレハナリ）辨論數日ニ渉ル云々（重罪事件ニ付キ辨論二日以上ニ渉ルヘシトスルハ之ヲ命スルモノトス輕罪以下ノ事件ニ付テハ此事ナシ）整頓（トリヲロフ）檢閲（シラ）

第三百十八條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辨論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヿヲ記載ス可シ

辨論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條　公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條　裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

紙尾（カミノオハリ）

上等ノ裁判所（重罪裁判所輕罪裁判所等ヲ云フ）呼出ヲ受ク可キ者（呼出狀ハ其ノ誤謬人違等ナキ爲メ務メテ之ヲ明記セサルヘカラス故ニ氏名ヨリ代人ヲ出スモ差支ナキマデヲ記載ス）猶豫（ユトリ）

第二章　違警罪公判

第三百二十一條　違警罪裁判所ニ於テ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移ス

ノ言渡

第三百二十二條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲソノ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サヽル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

第三百二十三條　呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

急速ヲ要スル事件之ヲ猶豫スルトキハ其ノ罪迹ノ消失セントスルヲ恐ルヽ場合等ヲイフ

名刺ナブ　證人トシテ其陳述云々　是レ其ノアガルヲ以テ速ニ裁判ヲ爲スノ法方ナリ訊問ニ取懸ル後ニ於テハ申質裝考ノ爲ニ非レハ其陳述ヲ聽クヲ可カラス

他ノ事件云々　動モスレハ遲參人アルヨヘ容易ニ開席裁判ヲナサスシテナルベク其ユトリヲナスノ旨趣ナリ

被告人代人ヲ以テ白狀云々　迹磬罪ヲ斷決スルハ迹ナルヲ尚フ故ニ本人ノ白狀アリテ其罪ニ服セバ之ヲ以テ足レリトス

民事原告人ノ請求　損害ノ賠償ヲ請求スルナリ

法律ノ適用　被告人ノ所爲ハ刑法ノ第何條ニテ罰スヘシト云フヲイフ

要償　ツグナヒワモトム

第三百二十四條　違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヲヲ得

第三百二十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヲヲ得

第三百二十六條　書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條　違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス

可シ檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條　違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條　被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ、

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辨ヲ爲ス可シ

代人出廷セサル時ハ（呼出ヲ受ケタル被告人民事擬當人等ヲ受ケタル被告人民事擬當人等）

一人モ出席セサル時ハ是レ其ノ雖讎ノ權ヲ放棄シタルモノナリ

故障ノ申立云々（闕席シタル者ヨリ故障ヲ申立タル者ハ先ツ其受ク可キヤ否ヲ判決シ受ク可キ者ナラハ書記ヨリ其ノ旨ト公判ニ爲スヘキ日時ハ前日ニ其申立人ニ報知シ著手スルヿヲ知ラシム）

第三百三十一條　呼出ヲ受ケタル被告人民事擬當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受タル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條　裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヿ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ

但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

明治十四年九月第四十五號布告刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス（故障ノ裁判ニ闕席シタル者ハ其申立人ナルト對手人ナルトヲ問ハス復ヒ故障ヲ爲スヿヲ許サス）

法律刑法

管轄違云々（管轄ヲ定メテ相互ニ之ヲ侵犯セサルハ法律ノ原則ナリ故ニ管轄違ト決定スルニ於テハ速ニ之ヲ送附ス）

第三百三十四條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三十五條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條　被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條　被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ拘留狀ヲ發スルヿヲ得

第三百三十八條　違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヿヲ得

ヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者ハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ豫納セシメ若シ豫納スルヲ可ナルトキハ控訴ハ又ハ上告ヲ爲サスヲ許スヲ

豫納マヘカタオサメル

一 被告人拘留ノ刑ニ處セラレ不服アル時

二 治安裁判所ハ其金額以上ノ裁判ヲ許サス然ルニ今之ヲ超過シタル裁判ヲ爲シタル時

擬律ノ錯誤 例ヘハ被告人ノ所犯科料ヲ言渡スヘキニ拘留ノ刑ヲ言渡ス如キアヤマリ

申立書 控訴ヲ爲ス旨ノ書面

對手人アヒテニン

通知シラス

一被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク

猶豫 證人ハ一日ノ猶豫ヲ以テ其ノ用意ヲ爲ス證人ノ猶豫日限ノ半減ナレハ只其ノ證迹ヲ陳述スルニ止リ辨護等ノ豫備ヲ要セサレハナリ

附帶ノ控訴 第二百四十九條ニアリ

新ナル證人 云々新ナル證人又ハ已ニ陳述シタル證人ヲ再ヒ呼出スコトヲ禁シタルハ裁判ノ迅速ト費用ヲ節減セシ爲ナリ然レトモ上席員ノ之ヲ爲シ又ハ許可スルハ此可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ獲シタル後其裁判ニ取掛ル可シ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヿヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヿヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヿヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言

明治十四年九月第四十四號布告違警罪ノ審判ニ關スル一切ハ手續ハ治罪法ニ從フ可シト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ內便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ上訴ヲ許サス

限ニ非ス

允許シ原

裁判言渡違警罪裁判所ノ言渡ヲ云フ

認可キヤウケル被告人ノミ檢察官ノ控訴アラザル時ヲ而スナリ

終審ノ對審裁判言渡始審ナル時ハ仍ホ控訴ヲ爲スノ途アリ又關係ナル時ハ仍ホ故障ヲ爲スノ途アリ終審對審ノ四字ニ着意スベシ

第三章此ノ章ハ輕罪

渡シヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヿヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條　第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ關係

裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條　檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第三章　輕罪公判

第三百四十七條　輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移ス

ノ言渡

第三百四十八條　呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條　被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得

第三百五十條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條　第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條　檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アリタル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシ

即チ禁錮罰金ノ刑ニ當ル者ト違警罪裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲セシ者トヲ裁判スルノ規則ヲ示ス

輕罪公判輕罪裁判所ノ受理スヘキ權限ヲ定メ此ノ他ハ公判ス可カラサルモノトス

代人出廷民事原告人ト民事擔當人ハ法廷ニ於テ對決スルニ止ルヲ以テ代人ニテ足レリトス

豫審ヲ經サル輕罪事件其ノ公訴豫審ス可キモノナル時

ハ裁判官ハ請求ヲ受ケ又ハ職權ヲ以テ捜證處分ヲ爲スヲ得但レ其ノ違警罪ニ付キ急速ヲ要スル時ノ方法ナリ今之ヲ豫審ヲ經ザル輕罪ニモ適用スル第百七條ノ參看ヲミルヘシ

辨解イヒワケ

要償ニ付キ其意見賠償ヲ求ムルニ付其ノ金額ノ見込ミ更ニ答辨ヲ爲スヲヲ得檢察官ノ求刑其當ヲ得スヲハ民事原告人ノ要求スル金額ヲ過分ナリ

メ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲スヲヲ得

第三百五十三條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辨ヲ爲スヲヲ得

第三百五十四條　罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヲヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條　闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條　闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヲヲ得

トスルトキハ更ニ答辨スルヲヲ得

禁錮ノ刑ノ言渡禁錮以上ノ刑ハ人間自由ヲ失ヒ權利名譽ヲ損スル實ニ輕カラズ故ニ闕席裁判ニヨリ其ノ刑ヲ言渡サレタルモノハ次ノ場合ヲ除キ何時ニテモ期滿免除ノ前ハ故障ヲ申立ツヘシ

一　被告人闕席ヲナスノ前嘗審選ノ言渡若クハ公訴受理ス可ラザルノ言渡アル可キノ申立ヲナシ聽許セラレスシテ退廷シタルトキノ如キヲ謂フナリ

二　被告人未タ何等ノ申立

一　被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二　裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三　被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲヲ知リタル證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲヲ知リタルヨリ三日內ニ故障ヲ爲スヲヲ得

第三百五十七條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヲヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經ザル事件ニ付テハ豫審判事ヲメ其指示スル所ノ條件ニ付取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲヲ得

ワモナサスト雖モ其ノ裁判言渡ヲ受取リタルトキハ其ノ受取リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スヿヲ得ルトス

三 例ヘハ逮捕ヲ受ケ又ハ罰金ノ徵收ノ爲メ財産ノ差押ヲ受ケタルニヨリ刑ノ言渡アリタルヿヲ知リタル時ハ其ノ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ申立ルヿヲ得ルトス

放免 全ク公訴ヲ免シテ被告人ノ自由ヲ復スルナリ是レ違警罪ノ犯人ハ之ヲ勾留スヿヲ遽時決斷スヿヲ得キモノトス故ニ其ノ勾留人ノ罪違警罪タルヲ知リタルトキハ之ヲ故免セサルヲ得ズ

釋放 罪ノ問フヿヲ可キアルモ其輕且微ナルノ故ヲ以テ法律上其自由ヲ許サヽルニ因リ其勾留ヲ解クナリ

其裁判所ノ會議局 釋罪裁判所ノ會議局ナリ會議局ハ第二百五十三條ノ規則ニ從フテ報告書ヲ作リ故障アルニ於テハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シタル上之ヲ管轄スル裁判所ニ言渡

第三百五十八條 犯罪證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免許ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲ス且被告人拘留ヲ受タル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケタル時ハ拘引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルヿナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アル迄檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付判決ヲ爲ヿヲ得

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヿヲ得

明治十四年九月第四十五號布告

一檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡ヲ爲スヲ得

民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條　控訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條　第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之レヲ適用ス

第三百六十九條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲナス可シ

第三百七十條　控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

明治十四年九月第四十五號布告

一檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三民事原告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡ヲ爲スヲ得

民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十五條　檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三民事原告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡ヲ爲スヲ得

民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ

第三百六十八條　第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之レヲ適用ス

第三百六十九條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲナス可シ

第三百七十條　控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第二條　控訴ノ期限ハ公訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラサス控訴ヲ爲スシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得

第三條　公訴人言渡ニ對シ控訴ヲ爲シタル被告人ハ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニ代ヘテ足ル塩合ニ於テハ別段ノ費用ヲ豫納セシムヘシ

第四條　被告人ニ於テ證人ノ定ニ對シ翌審ノ訴ヲナスヲ云

抵觸フレ　本接　訴訟ヲ受ケタル事件

鑑定人　輕罪ヲ犯スニ

裁判ニ對スル上告條中同法第四百四十四條等ヲ併シ便宜法ヲ設ケ眞行ノ法律ト爲シタリ

第七十四號

布告　本條ノ趣意ハ刑事ニ關スル控訴ヲ執行セザルトノ輕罪刑法第八條ニ記載シタル禁錮罰金ノ刑ヲ云フ

法律ハ被告人ヲ保護スルヿ多キ

モノナレハ輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ翌審ノ訴ヲナスヲ云

第四章　重罪公判

第三百七十二條　重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二　控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其ノ事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

公訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ナシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條　控訴ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

第五條　治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ニ對スル裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サ

明治十五年三月司法省丁第十三號達第一號以テ內ヲ內十七年第七十本年二月ヲ以テ始メテ重罪裁判所ニ於テ裁判ヲ開クヤノ手續等ニ付本訓及置候處其重罪事件ニ

用ヒタル物件ノメキヽ人ヲ云

管轉輕罪裁判所云々　犯罪ノ種類性質場所及ヒ被告人ノ身分ニヨリ各其所轄ヲ異ニスレハナリ

被告人拘留ヲ受ケタル時　禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

附帶ノ控訴　檢事長本案ニ附帶スル控訴アリテ被告ノ事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ依

一　被告事件始末及ヒ加重減輕ノ模樣

二　被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地

三　豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四　罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條　公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條　重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲スヿヲ裁判所長ニ請求スルヿヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辨論ヲ爲サシムルヿヲ得又數個ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辨論ヲ爲サシムルヿヲ得

第三百七十七條　書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ

係ル事實ノ探討若クハ此ニ關スル景況ノ通報等ハ右始審裁判所ニ於テ其取調ヲシタルモノトシテ爲サシムルヲ總テ是迄ノ第七十六條幷明治十四年當官丁第三十四號達ノ第一章ヲ除ク外（刑法第二篇第一章第二篇第二章ノ重罪ハ刑法第二篇第一章ノ重罪ハ嘉永元年第二章ノ重罪ハ嘉永元年法令ニテ裁判スル手續キ該ル可キモノヲ裁判スル手續キヲ亦スナリ）

重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時

獲審終結ノ言渡ニ付キ一日ヲ經過シテ故障ヲナサリ會議局ニ於テ會議決定ノ上之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヲ可シ

第四章　此ノ章ノ重罪

第三百七十八條　重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヤヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ代言人中ヨリ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲナサシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條　辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ是ヲ改選ス可正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之レヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條　書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條　辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヲアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヲヲ得ス

第三百八十二條　辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヲヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スル

明治十五年第一號布告治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ヲ選任シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカルヘシ

論ノ時ハ刑ノ言渡ヲ爲ス可キ場合ニ付キ會議局ノ言渡アリテ上告期限三日ヲ經過シタル時ハ大審院ニ於テ其上告ヲ却ケタル時及ヒ裁判官轄ヲ定ムルノ訴ニ付キ大審院ノ判決アリタル時即チ是ナリ

集取　トリアツメル

概略　アラマシ

以外　言渡書ニ因リテ起ル者ナレハ之ヲ其本トシテ立ツヲ以テ他人ニ及フヲヲ許サス

同一ノ被告人云々　一被告人ニシテ共ニ屬ノ代言人ヲ無ハ其分ノ內辯護人ヲ用ヒザル時モ其ノ言渡ノ限リニ在ラズ

テ附帯ニ非サル數箇ノ重罪アルトキ之レヲ集合シテ一ノ公訴狀ニ記スルトキハ大ニ錯雜ノ恐レアリ故ニ捜事長一罪毎ニ一公訴狀ヲ記メ數通ノ公訴狀ヲ作リテ毎件順序ニ辯論センコトヲ裁判長ニ請求スルコトヲ得ルナリ

裁判所長云々 裁判所長ハ各罪別々ノ性質記臓ヲ論辯セシムルニ之ヲ分チ又ハ之ヲ同時ニスルハ其ノ職權ヲ以テ之レヲ定ムルヲ得

各別ニ其謄本 被告人數人アルトキハ各人ニ備ヘシムル爲メ毎人ニ之ヲ送達ス可シ

送達アリタルヨリ二十四時ノ後 被告人カ送達ヲ受ケタル時ヨリ起算ス 選任エラビマカス

所屬フゾク 辯護人選任云々 被告人費用ノ堪ユヘカラサルナドヨリシテ自ラ辯護人ヲ撰任スルコト能ハサル時ニハ裁判所ノ費ニテ所屬代言人中ヨリ撰任シテ辯護人ヲ附スヘキモノ

コトヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルコトヲ得ス

但被告人現ニ拘留ヲ受タル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開廷ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廷ス可キコトヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スコトヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可

ト改選アラタスニ人ヲ

ニラ 辨護改選スヘキ正當事由其ノ辨護願述スル所被告人ノ意ニ適セサルヿ有テ之ヲ改メント欲スルニ道理アル申立アル場合

履行 フミオコナフ

刑ノ言渡 辨護人ハ被告人ノ爲メ其ノ無罪ヲ說明シ其權利ヲ保護スルモノニシテ重要公判ニ必ス之レ無カル可カラス若シ之レ無クシテ刑ノ言渡アリタル時ハ無効ノモノトス

シ其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

裁告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辨明セシム可シ

裁告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サヽル可カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル

辨論ニ取掛前ニ非ラサレハ 已ニ辯論ニ取掛リタル上ハ被告人自ラ其便益ヲ棄ルモノトスヘク又本案ノ辯論ヲナス權利既ニ整フテ差支ナキヨリセシモノト見做シ得可キカ故ナリ

抄寫 カキトル

接見面會ス閱讀ルヿ 允許ヨシトム

開廷 其事ニトリカヽル

證人氏名云々 原告被告互ニ其ノ證人ノ氏名人數ヲ報告スルハ其可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ裁判ヲ訊問スルヿ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヿヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヿヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヿヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辨論ノ終結シタルヿヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辨論中ニ發見シタル

ノ人名ヲ省テ之ヲ避ケシメ又ハ故障ヲ申立ルヲ得ル規則アルヲ以テナリ

證人トシテ宣誓ノ上公廷シテ面前ニ開ヘノ廳サイバン陪ヲヒラク席ニツラナル

豫備陪席判事 辯論二日以上ニ渉ルトキハ其間陪席判事ハ缺席セズト云フ可カラズ此時ニ俄ニ補充ノ判事ヲ命スルトキハ最初ニ遡リテ辯論ヲ求ムルヿヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條 第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヿヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ原告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲナスヿヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述スヘシ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヿヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律

論セズンハアラス其手數ヲ省カンカ爲メ裁判長ハ豫備ノ陪席判事ヲ置キ辯論ニ立會ハシメ自ラ他事ニ關係シ本訴ニ臨ム能ハサル時モ之レニ代ルモノヲ立テ置クヲ以テ輙ク交代スルヲ得ルナリ

答辭コタヘノコトバ

齟齬コトバノクイチガイ

呼立ツ可シ 出廷シタルヤ否ヤヲ檢スルナリ

注意キヲツケ

被告人豫審中云々 被告人已レノ罪ヲ隱蔽セン爲メ故ラニ白狀シニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲナサシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀

タル事件ヲ確認セズト言ヒ又ハ其ノ白狀ヲ取消サントスルヿアルトキハ豫審中ノ白狀ハ眞ニ白狀セシモノナレハ何ガ故ニ前ノ白狀ヲ確認セストシ又ハ取消サントスルヤ其ノ事由ヲ辨明セシムヘシ

確認セス シカト知ラズトイフワル

辨解 イヒワケ

反證 被告人ノ罪トナル

ヘキ證據ヲ原告人ヨリ出セシヲ被告人ヨリ反テ罪トナラヌ證據ヲ出スヲイフ

及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聞ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述スヘシ

民事擔當人ハ答辨スルヿヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヿヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日內ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ

明治十九年六月勅令第四十六號追徵ノ罰金及ヒ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰金及

對質ツキアワセテタヾス

前項ノ處分 更ニ證人ヲ訊問スルヿ又對質スルヿノ取計ヒ

愛憎 アイスルヒニクムタメニ罪ヲ輕クセントヒニクムタメニ罪ヲ重クセント思フヿ

長懼 此事柄ヲ日被告人ノ害ヲナサンコトヲオソレル

退席 シラスルワタチ

終結 ノカクセルヲチヤク

發見 ミイダス

辨論中發見 罪犯ノ原由ハ豫審ニ於テ之ヲ詳悉スル者也ト雖

之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲナス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヿヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

追徵金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告主意書ニ添ヘ原裁判所ニ送付シ否ヤ之ヲ得ルヲ以テ往々アリ以テ裁判ヲ審定スルヲ得ベシ

而事件ノ繁雜紛擾ナル時或ハ之ヲ相漏ニ涉リ却テ法廷辯論ノ開

認可キハトゞケル第三百五十七條ノ規則ニ

新ナル證人ヲ呼立ルヲ得ルヿ

法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス被告人ノ罪ハ刑法第何條ノ罪ニシテ何條ノ刑ニ該ルモノナリトノ意見ヲ陳述スルナリ

當ヲ得ザル道理ニアラヌ

二裁判所ノ擬成規則ニ背キタル時

三法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サルニ裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヿヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

○勅奏任官華族帶勲有位者犯罪處分方

明治丙十五年十一月司法省達第五號

今別紙之通御達相成候條此旨達ス

勅奏任官ニ刑罪ヲ犯シタル官吏及ヒ其族帶勲有位者ニ對シ司法卿ハ其事狀ヲ奏聞シ裁可ヲ仰ヲ

閉鎖前ニ之ヲ開カサルヲ以テナリ

原被ノ要償

無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖ドモ常ニ被告人ハ必ズシモ賠償ノ責ヲ免ルヽヿ能ハザル場合アリ又第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリナス所ノ要償ノ場合ヲモ包括スルモノナリ

對審裁判云々第四百十條ニ記載シタル事件ニ付テハ大審院ニ上告スルヲ許スヲ以テ重罪裁判所ノ言渡タリトモ其規則ニ反クヿ時ハ之ヲ終審ナリトセズ上告

十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヿ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヿヲ得ス

第四百十二條　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十二條ニ定メタル原由ニ付上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十三條　上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十四條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條　豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時

華族ノ證(位記ノ有無且戸主隱居子弟ニ拘ハラス)罪ヲ犯シ拘留シタル時ハ自今其院裁判所ヨリ直ニ宮内省へ通牒シ猶刑ノ言渡ヲナシタル時ハ其宣告書ノ謄本ヲ係へ是亦同様達ニ可致通牒此旨相達候事

○受恩給者犯罪處分方

明治十六年四月司法省丁第十五號達

明治八年第百四十八號公達海軍恩給令幷ニ明治九年第九十九號公達陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ受ケ幷ニ該恩給

スルヲ得

闕席裁判言渡書云々　闕席裁判ヲ為スニ於テハ被告人其辯護ノ權利ヲ抛棄シタル者ナレハ其ノ言渡書ハ之ヲ本人ニ送付スルニ及ハサルモノナル故ニ此條アリ

捕ニ就キタル時　トラマヘラレタルトキ

受理　ウケツケル

本會　今回開廳ノ間

次會　其次ニ開廳セシヰ

大審院　職務大審院ハ最上等ノ裁判所ニシテ法律ノ要旨ヲ解釋シ法律ノ適用ヲシテ日本全國一

ハ拘留保釋責付釋放及放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條　上告ヲ為サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條　上告申立人ハ其申立ヲ為シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條　對手人ハ上告趣意書ヲ受取タルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條　檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯

ヲ有スル軍人ニシテ治罪法第二百七十條ニ據リ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アルヰハ其都度直チニ大藏省へ通知可致此旨相達候事

但新法實施已後是迄本文ノ處分ヲ受ケタル者有之候ハヽ其旨直ニ大藏省へ通知可致事

明治十六年九月司法省丁第廿五號達

陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者及扶助料ヲ受ル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪ノ處分ヲ爲スヰハ恩給登錄寫帖ヲ收奪シ宣告文ノ寫相添其都度速ニ當省へ差出ス可シ此旨相達候事

○陸軍常備下

途ニ出デシムル所ニシテ其職務重且ツ大ナリ

上告　上訴ノ一ニシテ豫審又ハ公判ノ言渡シ法律ニ背キ定規ニ違フ者アル場合ニ於テ其言渡ヲ取消サンヿヲ大審院へ請求スルモノナリ

一　第二百三十七條第二百卅八條第二百七十九條ニ定メタル原由アルヿヲ照ラシテ忌避ノ申立ヲ為スモ會議局ニ於テ之ヲ許可セザル時

二　重罪ハ裁判官五名ニテ裁判ヲ為シ輕罪ノ控訴ハ三名以上ニテ判決ヲナス等ノ規則ニ背クヰ又ハ第四十七條ノ規則ニ背

書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ又同シ

第四百二十條　書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其ノ裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヿヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條　上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヿヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ為シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ為シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長

士卒逃亡罪犯處分
明治十六年八月司法省丙第六號達
陸軍常備下士卒服役中ノ者逃亡罪ヲ犯シ其處分ヲ為シタル節ハ其人名罰科ヲ詳記シ其都度本人所管（隊付ナレバ該隊長）ヘ速ニ通報可致此旨相達候事
○海員犯罪處分
明治十六年七月司法省丁第二十一號達
明治十四年（十二月）第七十五號公布西洋形船船長運轉手機關手免狀規則ニ據リ免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節ハ刑名并ニ宣告ノ月日ヲ詳記シ其都度直ニ

キタル時モ亦構成不規則ナル者トス　四　第二百六十三條第三百八十一條ハ或ハ裁判言渡ヲ公行セサルニヨリ無効ニ屬シ或ハ辯護人ナクシテ重罪ノ刑ヲ言渡シタルハ無効ニ屬スルヿヲ云フナリ此ノ規則ハ實ニ緊要缺ク可カラザルモノニシテ之レニ背キタルトキハ異議ノ申立ヲ為スヲ得ベキモノナリ此ノ異議ヲ申立タルニモ關ハラズ之レヲ認可セザルトキハ上告ヲ為スヲ得ベキモノナリ

無効ノ記載ナキ規則ニ背キタ

ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條　院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閱シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意ヲ付ス可カラス

第四百二十三條　上告申立書及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヿヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條　書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條　開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

農商務省ヘ通牒スヘシ此旨相達候事
○勳賞ヲ有スル者犯罪處分方
明治十五年四月司法省丙第十六號達
從前違警沒收ノ儀ハ條例第四條ニ依リ行政官ニ於テ沒收致來候處右ハ本年（一月）當省丙第九號達（帶默著罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪等ノ言渡アリタルト居出方）ニ照準シ處分スヘシ此旨相達候事
○沒收物件公賣費用
明治十八年九月內務省第三十二號達
犯則ニ由リ官沒シタル物件ヲ裁判所ノ囑托ニ依リ戶長ニ於テ公賣取扱ヒタル節右公賣ニ關スル

ル云々　例ヘハ第三百條ノ規則ニ背キ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメザルニ因リ其被告人異議ノ申立ヲ為スモ之ヲ認可セスシテ裁判言渡ヲ為スノ類　五　期滿免除大赦若クハ確定裁判ノ効力ヲ得タル事件ニ關スル公訴ヲ受理シ又ハ是等ノ事情ノ一ナキ場合ヲ誤リテアリトシテ公訴ヲ受理セサリシカ如キモノトス　六　第百二十八條第百七十六條第百八十七條第百九十四條第二百二十條第二百二十五條第二百九十三條第三百二條等ニ定メタル場合ニ於テ檢察

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條　上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サヽル時ハ其儘ニテ判決ヲ為スヘシ

第四百二十七條　大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ為ス可シ

第四百二十八條　大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ為ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條　擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヿニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ移スコトナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ為ス可シ

第四百三十條　豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヿアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサヽル時ハ其事件ヲ他ノ

費用（物件看守者ノ手當并ニ藏敷料筆紙墨薪炭油雜費）ハ其裁判所ノ費用ニ相立ヘキモノニ付戸長役塲費ヨリ支辨セザル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○没收物件處分方

明治十八年七月司法省丙第六號達

没收物件處分ノ義ニ付左ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條自今處分方心得ノ爲メ此旨相達候事

没收物件處分之儀ニ付伺

刑事裁判上没收ニ係ル物件ハ破壞廢毀（燒燬之分ヲ除ク）之後若クハ原形之儘ニテ公賣ニ付シ其代金ハ雜收

官ノ意見ヲ聞カザル時

七 訴訟關係人ノ請求アラバ之ヲ判決スルハ裁判官ノ任ナリ又請求ナキニ之ヲ判決スルハ禁スル所ナリ然ルニ之ニ反シタル處分アル時但職權ヲ以テ判決シ得ル條項ヲ除ク

九 第二百二十八條及ヒ第三百四條ニ於テ定ムル如ク裁判言渡ニハ必事實并ニ法律ノ理由ヲ缺クヲ得ス

十 豫シメ人ヲ殺スノ意ヲ以テ許稱誘導シテ人ヲ死ニ致シタル者アランニ刑法第二百九十七條及ヒ刑法第二百九十二條即チ謀殺ヲ以テ論ス可キニ抑テ刑法第二百

裁判所ニ移スヿナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル塲合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヿヲ得

入トシ國庫ニ納付ス可キノ成規ニ有之候處今般警視總監大迫貞清ヨリ別紙之通上申相成候因テ審按スルニ犯罪ノ用ニ供シタル器具ニシテ異種ニ屬スルモノヽ如キハ警察官ニ於テ豫テ其製造法及用方等ニ注意シ置ク片ハ犯罪搜査上便利ヲ得ルヿ尠カラス犯迹ニ因テ使用ノ器具如何ヲ推知シ隨テ犯人ノ誰タルヿヲ發見スルノ塲合亦之レナシトセサレバナリ且有異種ニ屬スル器具ノ如キハ其儘人民ニ私有セシムル片ハ其危險測ル可カラサルヲ以テ必ス先ツ破壞スルニ非ラサレ

九十四條故殺ヲ以テ論シタルカ如キコレナリ

十一 例ヘハ犯罪事件禁錮ノ刑ニ該ラサル塲合ニ於テ自由ヲ停止ス可キ令狀ヲ發シタルカ又ハ勾留ノ期日成規ニ過クルカ又ハ現行犯ノ塲合ニアラスシテ豫審判事訴ヲ待タスシテ豫審處分ニ取掛リタルカ如シ

被告人ノ利益ノ爲メニ定タル規則ニ背ク

免訴又ハ無罪ノ言渡ハ被告人ノ利益トナル者故假令其他ニ被告人ノ利益ヲ目的トシテ定メタル

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル塲合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スヿヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ塲合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヿヲ得

一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サヽル時

三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタル日ヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送

ハ公費ス可カラサルモノトス已ニ之ヲ破壊センカ其原質ハ唯所物ノミ之ヲ公費スルモ酷スニ類スル手數ノミシテ巨領ノ收入ヲ得ルヲ離キヤ明瞭ナリ今自ハ檢察官ニ於テ犯罪ノ用ニ供シタル器具ノ種類ハ其他警察上ノ處置ニ關係シ雖モ注意ヲ要スルモノトス之ヲ警察官ニ交付シ若クハ警察官ニ付シ保存シ右ノ如ク收入ニ至テハ急ニ指令ス

第三條實況ニ背クコアリテコレニ無罪免訴ノ言渡アレバ爲メニ消滅スルモノトス又犯罪ノ場所ニ因リ管轄スル裁判所ノ相違アリトモ是亦消滅シ上告スル能ハザルモノタリ重罪ノ被告人ハ裁判ヲ言渡サレシテ裁判ヲ言渡サレタル場合等ワイフ

附帶ノ上告

百二十九條 經過シ對手人ハ同一ノ期限內ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ判決アルマヲ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヿヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレバ之ヲ爲スヿヲ得ス

一 人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二 同一ノ事件ニ付キ其犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三 犯罪ヨリ以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルヿヲ證明シタル時

四 被告人ノ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ僞造又ハ錯誤アルヿヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ者左ノ如シ

一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三 大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

殿三條實況指令（朱書）伺之通

明治十八年七月六日

犯罪ノ用ニ供シタル器具之ヲ上申ス付

犯罪ノ用ニ供シタル器具ノ種類如何ヲ詳知スルハ犯跡鑑定等警察上必要ノ事ニ付爾後其異種ニ屬スル蒐集ノハ之ヲ當ニ保存シテ當ニ就テ致度ノ伺ヲ指令ス

明治十七年十二月十五日

警視總監司法卿伯爵

及ヒ對手人

被告人民事原告人又ハ民事擔當人ヲ云フ檢察官ハ其中ニ含ス

檢事

其上告事件ヲ擔當シテ公判ヲ爲スベキモノヲ云

檢閱

シラベル自己

經由

手ヲ經テ

擴張

オシヒロメテ

辨明書

イヒワケノショメン

檢事長

檢察官上告申立人及ヒ對手人ハ代人ヲ立ルヿヲ得

代言人

差出ス云々

○山田顯義殷犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ノ用ニ供シタル物件ハ其所有主ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ヲ待ツテ共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘキモノトスルトキハ其物件ヲ在之ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スベシト雖モ次ノ條タニ破棄スヘキモノトスルトキハ其ノ事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スベシト雖モ破棄セタル例外ノモノハ此限ニアラズ

明治十五年第五十四號司法省丙第四十二號ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ノ用ニ供シタル物件ハ其本案ノ裁判ヲ待ツテ沒收ノ言渡ヲ爲スヘキモノトスルトキハ其物件ヲ在之ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スベシト雖モ破棄スヘキモノトスルトキハ其ノ事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スベシト雖モ次ノ條タニ破棄セタル例外ノモノハ此限ニアラズ

差出スヲ得ルノ期則ナレ𪜈之ヲ差出サヽル隨意ニシテ敢テ之ヲ爲サシメズ對審シタル者トシテ裁判

第四百四十二條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘテ之ヲ大審院檢事長ニ差出スヘシ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條　大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一各ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條　大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條　大審院ニ於テ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲

利害ヲ及ホサヽル時ハ例

パ豫審ニ於テ檢證處分ヲ爲スニ當リ書記ヲ立會ハシメザリシニ竟ニ證憑ヲ發見セザリシ場合公判ニ於テ被告人ヨリ裁判官ヲ忌避スト雖法律ニ背キ其中立ヲ認可セス然ルモ其裁判官直チニ自因リ得タル物件ハ他人ノ輾轉シテ回避シタル等ノ場合コレナリ

言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合

豫審又ハ公判ニ於テ共犯又ハ數罪ヲ合セテ一箇ノ言渡ヲ爲シタル場合ニ於テ其言渡ノ可キヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條　再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條　通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管轄スルヿ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ

得相違候事

○既決囚ノ逃走者ニ發スル令狀 明治十四年司法省丙第廿號達

新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ始審裁判所撿事ヨリ發スル儀ト可心得此旨相達候事

明治十五年四月司法省丙第十四號達

既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ儀ニ付テハ昨十四年丙第二十號ヲ以テ相達置候處始審裁判所〃在ノ地ヲ除クノ外ハ現ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發ス

幾分ニ對シ上告スル者アル時

他ノ裁判所

原裁判所ガ重罪裁判所ナル片ハ重罪裁判所ハ常立ニ非サルヲ以テ他ノ裁判所ヲシテ執行セシメザルヲ得ス

接近（モヨリ）

再審ノ訴

控訴上告ヲ經盡シ若クハ是等ノ控訴上告等ヲ爲サヽルニ因リ裁判言渡既ニ確定シタル後其裁判言渡ハ事實ト大ニ異ナルノ確證アル場合ニ於テ再ヒ之ヲ審ニシテ更ニ相當ノ裁判言渡アランヿヲ請求スル者ヲ云フ

爲スヿヲ得

大審院撿事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヿヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之レヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ撿事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

ル儀ト可心得此旨相達候事

明治十五年二月同丙第六號達

始審裁判所撿事ヨリ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左ノ通心得ヘシ此旨相達候事

第一條 逮捕狀ニハ逃獄ノ報知書ニ依リ第二號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相等ヲ詳記スヘシ但管轄地ノ内外ニ拘ハラス急速ノ際巡査ヲシテ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ナシ

第二條 管轄

確定ノ後ニ非サレハ裁判

確定セサル者ハ尚ホ通常規則ニ從ヒ上訴ヲ以テ數議挽回スルノ道アルヲ以テ敢テ非常ノ法ニ依ルヲ要セス

二 例ヘハ甲者ヨリ東京裁判所ニ於テ滊車旅客乙者ノ物品ヲ盗取シタリトシテ刑ノ言渡ヲ受ケタリ然ルニ丙ナル者亦同一ノ事件ニ付横濱裁判所若クハ同一ノ裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケ而メ皆共ニ共犯ト認メラレサル時ノ如キヲ云フナリ

三 犯罪アランニ被告

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院撿事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヿナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ摸樣ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヿ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ撿察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヿヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辨論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出スヘシ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリ

地内ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム

第三條 管轄地外ハ第一號書式ニ準シ相書ヲ作リ始ヲ判之所檢事ニ送致シ捕ヲ囑托ス處ノ書ヲ囑託ヲ受ケタル時ハ受託ヲ得タル檢事ニ依リ人相書ヲ以テ名氏ヲ更ニ捕ヲ作リ狀ヲ警察官ハ其目的ヲ爲シ檢事ニ致シ捕ヲ囑託ス

第四條 警察官ハ檢事ニ送致シタル時ハ其目的ヲ爲シ檢事ニ致シ捕ヲ囑託ス

○勾引狀ノ期限 明治十五年二月司法省丙第四號達ニ定メタル勾引狀ノ期限ハ總テ休暇ノ日ヲ算入スヘカラス但平常休暇ナキ官署ニ付テハ官署ノ用ヒサル例ニ準シ此ノ日ヲ相達可ト心得ル事

○書類送達 明治十六年二月司法省丁第五號書類送達ノ事ニ付テハ長ヲ刑事ニ經テ本人ヘ

トシ訴ヘラレタルモノ其場合ニ居ラサル證據公正ナル證書ヲ以テ申立タル時

四 裁判官檢察官警察官賄賂ヲ收受聽許シ若クハ恐ヲ挾ミテ被告人ヲ害スオトシ又ハ何人ヲ問ハス不實ノ事ヲ以テ被告人ヲ誣告シタル人ヲ刑ニ處セラレタル時

通常規則ニ從ヒ

其ノ裁判所ハ再審ノ訴ヲ法式ヲ用フルニタリトモ別段ノ非公安犯罪ノ性質例ス

公安犯罪ノ性質例

トシ或ハ瓦民イキドホリテムゴキ段ノ事由アレ所爲ヲ被告人ニ非サレハ捕ヲ囑ノ地ニ於テ刑ヲ執行スカ

○勾引狀ノ期限 明治十五年二月司法省丙第四號達ニ定メタル勾引狀ノ期限ハ總テ休暇ノ日ヲ算入スヘカラス但平常休暇ナキ官署ニ付テハ官署ノ用ヒサル例ニ準シ此ノ日ヲ相達可ト心得ル事

○書類送達 明治十六年二月司法省丁第五號書類送達ノ事ニ付テハ長ヲ刑事ニ經テ本人ヘ

ハ被告人ノ員數極テ多ク又ハ地方ノ民心騷動シテ被告人ヲ刺撃シ或ハ瓦民イキドホリテムゴキ段ノ事ニ照會シ別ニ捕ヲ囑ノ地ニ於テ刑ヲ執行スカ

所爲ヲ被告人ニ加ヘントスルノ妨礙ヲ生スルノ險ヲ除去シ裁判ハ恐アル等其他裁判ニ對シ紛擾危所ヲシテ獨立不羈ノ位地ニ置カシムル云

分身ニ付嫌疑云々

被告人ハ其裁判所ノ官吏ナル等ナル又ハ巨商大賈タル等ヲ云

地方ノ民心云々

宗教ニ關スル事等ニ付キ多ク其例ヲ見ルナリ

嫌疑ノ

ダルヨリ三日內ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日內ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テコレヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作リ左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

書類ヲ送達ス可キ際是迄戸長ニ於テ使丁賃錢繰替渡シヲ爲シ候儀モ有之候處自今繰替ヲ要スル節ハ一時裁判所ニ於テ繰替置追テ本人ヨリ償却セシムヘキ儀ト心得ヘシ此旨相違候事

但從前ノ指令內訓本文ニ抵觸スル條件ハ取消候事

○監倉獄舍ニ在ル被告人ヘ書類送達 明治十六年七月司法省丙第四號達 監倉若クハ獄舍ニ在ル被告人ヘ送達スヘキ總テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署ヘ送達ノ手續ヲ囑托シ該署ニ於テハ規則ニ從ヒ本人ニ送達シ

爲メ裁判管轄地方ノヨツスニ因リオダヤカニ裁判シ得ヘカラサルヲ以テ裁判ヲ移スノ訴ハ其關係人ヨリモ之ヲ爲スヲ得 第四百六十條 刑法第十三條ニ死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ズトアリテ死刑ノ言渡ハ確定スト雖モ直チニ之ヲ行フ可カラス檢察官ヨリ死刑ノ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出シ之ヲ鄭重ニスル者ハ一旦之ヲ過ルトキハ取戾スコトヲ得ス別ニ規

一 犯人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作リ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異義ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

令狀ハ其正本其他ハ送達書ノ一本ヲ裁判所ヘ返還スヘキ樣取計ヘシ此旨相違候事

但從前ノ指令內訓本文ニ抵觸スル條件ハ總テ取消候事

○減輕ニ因リ輕罪トナリタル被告人裁判管轄 明治十五年六月司法省丙第二十一號達 被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得ヘシ此旨相違候事

○證人鑑定人旅費日當 明治十五年六月司法省丙第二十五號 刑法治罪法實施以來刑事ニ

則ヲ以テ之ヲ定ム 本條ハ刑法附則第一章ノ主刑執行ノ條項ヲ述ベタルモノナレハ彼レニ就テ見可シ 四百六十六條 疑義ノ申立ハ裁判言渡中ニ審ナラス疑フ可キ所アレハ之ニ對シ說明ヲ乞フ書ナリ 復權 重罪ヲ犯シ因テ公權ヲ剝奪セラレタルヲシテ其將來ノ權ヲ復セシムルヲ云 四百七十二條一項 本人受ケタル所ノ刑如何ナルヤヲ明ニス

裁判ニ於テ本犯ナルヿヲ認定スルヿ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヿヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サズ

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還スヘキ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

付出廷セシメタル證人ノ旅費日當等ハ一時官費ニ立換渡シテ後日其費用ヲ被告人ニ負擔セシメ
○有罪之判決ハ當該旅費ヲ爲シ
○法廷ニ出ル者ハ其日數ニ應シ
○陸海軍治罪法ノ件
○都テ取消ノ件々ハ
○本令及文書ニ抵觸スルモノハ當分施
○但從前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施
○明治十分方交涉ノ件
○晉通治罪法
○陸海軍治罪法
○第二十八年布號
○月日
○告普通治罪法軍治罪法
○第一條 行ハレ
○第一條 帶人軍人ハ陸軍
○刑法若クハ海軍刑法ノ犯罪ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判
○刑法若クハ海軍刑法ノ犯罪ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判
○第二條 帶人共犯ハ重ク軍人ニ從フ
○但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ
○第二條 帶人共犯ハ輕ク軍人ニ從フ
○軍人ハ軍法ノ犯罪ニ付テハ普通裁判ニ會シ
○軍人ハ軍法ノ犯罪ニ付テハ普通裁判ニ會シ
○所公衆共ニ於テ逮捕シタル人ハ普通裁判ニ付シ
○於テ逮捕シタル人ハ普通裁判ニ付シ
○證憑書類ノ類ハ共ニ之ヲ普通裁判官ニ送ル

二 主刑ノ終リタルヲ證スル證書以テ獄則ヲ守リ敬心ノ狀アリタルノ證ナリ
三 犯人ノ心ノ如何ヲ知ルト民事ノ責ナキヲ顯ハス
四 以前日今ノ刑狀ヲ示シ犯人ノ行爲如何ヲサグル便アリ
五 復權ノ願ヲスデダルヲ云フ
特赦 特別ナル赦典ニシテ之ヲ與フル特赦ハ天皇陛下ノ特權ナレハ如何ナル場合ニ其中立ヲ爲スハマヘカドニ定メラレヌナレ共其中立ヲ爲スハ檢察官監獄長及ヒ司法卿
情狀ヲ具シモヤウツブサニ申上ルナリ
上奏 天皇陛下ヘ申上ルナリ
檢事長ハ更ニ云々 檢事長ニハ檢事ノ意見ト書類ニ由リ更ニ要用ナル取調ヲナシ又其ノ意見ヲ添ヘテ司法卿ニ差出ス
勅裁 天皇陛下ノ御裁決
前項ノ場合

第四百七十二條 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヿヲ證明スル書類
三假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書
四賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書
五過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類
第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添之レヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ
第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ
第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ
第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ

棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ
前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スヿヲ得ス
更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ
第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事長ニ送達ス可シ
檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付スヘシ
又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立

第四編

軍法會議ノ管轄ニ付テハ軍法會議ノ判決ノ確定シタル後ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ管轄ニ移ス但軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第五編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ管轄ニ移シタル後ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第六編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡ヲ爲シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第五編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第六編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第五編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第六編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第五編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第六編

軍法會議ノ判決ハ其事件ニ關スル普通裁判所ノ言渡確定シタル後ハ其事件ニ關スル軍法會議ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

ルヿヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲナス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏スヘシ

第四百七十八條　司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲナスヿヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條　特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條　特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

福井淳註釋

傍訓監獄則註釋

明治二十年十一月出版

稽頭
内訓
伺指
令

監獄則目錄

第一編

第一章　汎則

第二章　監獄ノ規程

第三章　監獄ノ構造

第二編

第一章　役法　附時限

第二章　工錢

第三章　徒刑流刑及禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第四章　假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舍

第三編

第一章　給與

第二章　疾病　附死亡

第三章　書信（ショシン）
第四章　接見（セッケン）
第五章　差入品（サシイレヒン）
第四編
第一章　教誨（キヤウクワイ）
第二章　賞罰（シヤウバツ）
第三章　懲罰（チヤウバツ）

監獄則目錄終

○別房留置者ハ犯則處分法明治十六年十二月第六十二號監獄則第三十條ニ依リ監獄ノ別房ニ留置シタル者及中ノ別房ニ留置シタル者ハ刑法附則第三十二條ニ依リ別房ニ留置シタル者若シクハ監ノ賭則ヲ犯ストキハ監則第百七條ニ準擬處分スル旨相達ス

○第一條　監獄ハ入監ヲ爲サシムヘキ人ノ如何ニヨリ其ノ種類ヲ區別スルナリ其區別ヲ爲ス目意ハ拘禁シ自由ヲ停止スルノ所以ニシテ在監者ニ未已決ノ兩者アリ又懲治者アリテ未已決ト稱スヘキカラサルモノ同クシ懲治人ノ者アリ然ルヲ監ヲ懲役場ニ入レテ重罪輕罪ノ囚ト同クシ重罪輕罪ノ囚ヲ一時ノ留置場ニ入ルヽ等其教誨上ニ害アル勘ナカラス故ニ其監ヲ異ニシ各自ノ權利ヲ保護スル爲メ輕重ニ從ヒ即チ留置場監倉懲治場拘留場懲役場其他ノ方法ニ依リ共ニ總テ該則ノ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ準シ服役者ハ明治十年第一號達監獄則第五條ノ犯人ハ九月第八十一號布告ニ據リ懲罰ニ處シタル賭博犯人服役方法ハ明治十年第一號達ニ依リ賭博犯人ノ懲役場ニ入レテ重罪輕罪ノ囚ト同クシ一時ノ留置場ニ入ルヽ害ニ上ニ害ヲ懲役場懲治場拘留場ト名ナシ拘留狀

參看標註傍訓監獄則

第一編

第一章　汎則

第一條　監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一　留置場　裁判所及ヒ警察署ニ屬スルモノニシテ未決者ヲ一時留置スルノ所トス但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二　監倉　未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三　懲治場　懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四　拘留場　拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルノ所トス

五　懲役場　懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス

六　集治監　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集

テ處分スヘシ此旨相達候事
○罰金ヲ輕禁錮ニ代ヘタル犯人留置塲
明治十七年七月內務省乙第三十四號達
罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル塲合ニ於テ其日數十日以下ナル時ハ拘留ノ例ニ依リ警察署附屬ノ留置塲ニ於テ執行スルヿヲ得ル儀ト心得ヘシ此旨相達候事
○女囚徒留置塲
明治十八年九月內務省達番外
懲役終身ノ刑又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監獄ニ留置シ其囚徒ニ係ル一切ノ費用ハ國庫費ヨリ支辨候條此旨相達候事

又ハ收監狀ヲ發シタル者懲治者及拘留懲役禁錮及重罪ノ刑ニ處セラレタル者ヲ區別シ入ルヽ所トス
○第二條未決者ノ處斷已決囚ノ赦免ヲ奏請スルハ司法卿ノ管理ナルモ各在監人ノ管束ニ至リテハ之レヲ行政官ニ管轄セシム而シテ陸海軍ノ軍人軍屬ヲ罰ス可キ刑法ニテ處分セラレタルモノハ別ニ陸海軍監獄アレハ此限ニ非スト云ナリ
○第三條集治監ハ每府縣ニ置ク者ニアラス適宜ノ地ニ置キ重罪ノ刑ニ處セラ

治スル所トス
北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第二條　監獄ハ內務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

第三條　集治監ハ內務卿之ヲ直轄ス留置塲監倉懲治塲拘留塲懲役塲ハ警視總監又ハ府知事東京府ヲ除ク縣令之ヲ管理ス

第四條　此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキモノニ適用スルヿヲ得ス

第五條　內務卿ハ每年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ
警視總監府知事縣令ハ每年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ
裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ
府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルコトヲ得

○假出獄停止手續
明治十八年九月司法省丙第七號達
第一條　假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ後現ニ之ヲ管束スル所ノ典獄ニ於テ直チニ假出獄ノ停止ヲ申渡シ當初下付シタル假出獄ノ證票ヲ取上グヘシ
第二條　典獄ニ於テ假出獄ヲ停止シタルトキハ其事狀ヲ具シ內務司法兩卿ニ開申スヘシ
第三條　甲地方ニ於テ假出獄ヲ許シタル者ヲ乙地方ニ於テ停止シタル

レタル囚徒ヲ集治スル所ナレハ內務卿之ヲ直轄シ其他ノ五監獄ハ之ヲ警視又ハ各地方長官ニ委任シ之レヲ管理セシムルナリ
○第四條ハ凡テ軍人軍屬ハ自ラ陸海軍ノ刑法有テ之ニ觸ル、モ普通刑法ヲ犯スニ非サレハ當サニ陸海軍ノ刑法ニ照ラシテ其刑ニ處斷シテ少シモ普通刑法ニ關スルヿナケレハ之ヲ適用スルヲ得ス即チ刑法第四條及治罪法第二十九條ヲ參看スヘシ
○第五條ハ監獄ハ能ク注意シテ在監人ニ幸不

第六條　在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記載シタル者ヲ云フ

第七條　在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ苦情ヲ訴ヘントスルトキハ第五條第一項第二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルヿヲ得

第二章　監倉ノ規程

第八條　司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スルノ外恣ニ責罰スルヲ得ス

第九條　典獄看守長ハ日夜不時ニ監房ノ內外ヲ視察シ或ハ物件ヲ査閱シ其他囚徒ノ傲惰ヲ生シ脫越等ノ事ナカラシムルヲ要ス

第十條　新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀收監狀又ハ處刑宣告書等ノ文書ヲ査閱シテ之ヲ領シ其領收ノ證ヲ引致シ來タル者ニ交付ス其文書ナクシテ引致セラレタル者ヲ入監スルヲ得ス

トキハ乙地典獄ヨリ其方地方典獄ヘ甲地方ノ獄ニ通知シ假出獄ノ證票ヲ致スベシ

第四條　前條ノ場合ニ於テ乙地方ノ監獄ニ送致シタル囚人ハ其ノ獄ニ拘禁スルトキハ其ノ監獄ノ新入者ト同ジク本刑ノ時間ハ臨時ニ巡閲セントスル府縣會議員ハ否ヤヲ視察スル又ハ行政官ニ適シタル行政官ヲ給與衛生方法等ノ事果シテ成規ニ後ト刑ナシ乙地執行方ニ於テ行スベキ遺體

○解剖　明治十八年七月五號達第十二則ニ掲ク

監獄ニ拘禁シタル刑死者ノ遺體ハ其ノ死因ヲ詳ニシテ病院ノ醫學校ニ於テ解剖シ實驗ニ供スル旨相達ル

○第六條　在監人ト稱スルハ未決者及ヒ既決者トヲ謂フ

未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法廷ニ引致ノ時モ同往セシムルヲ得ス

既決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其ノ監房ヲ別異ス

第十一條　入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ携帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第十二條　新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ樣本ニ照シ其要領ヲ詳錄シ一小房內ニ於テ通身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒ツヘシ懲治人ノ監舍ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條　總テ監房ニ入ル丶物品ハ典獄一々之ヲ精驗シ危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ

第十四條　總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄一々證印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但點檢ノ際隱匿セシ貨物ハ沒收ス

但屍體剖觀ノ後ハ原體ニ合シテ復ス不相取計ハシム

○犯人護送ヘ司獄官告ノ後ハ刑號達ノ法省丙第八號達ノ通ル

明治十五年三月司法省丙第八號達ノ通ル

○犯人護送ヘ司獄官ハ規則ヲ守リテ在監人ヲ取扱フモノナレハ此ノ官吏ノ處置或ヒハ憂虐等ノ規則ニ違反スルノ事アラハ在監人ノ不幸苦シキモノナル故ニ其ノ申告ノ道ヲ開キ情苦ヲ訴ヘント欲セハ第五條第一項第二項ニ定メタル獄官吏ノ權限ヨリ其事務ノ規則ヲ示セリ

○第七條　司獄官吏ハ規則ヲ守リテ在監人ヲ取扱フモノナレハ此ノ官吏ノ處置或ヒハ憂虐等ノ規則ニ違反スルノ事アラハ在監人ノ不幸苦シキモノナル故ニ其ノ申告ノ道ヲ開キ情苦ヲ訴ヘント欲セハ第五條第一項第二項ニ定メタル獄官吏ノ權限ヨリ其事務ノ規則ヲ示セリ

○第八條　囚人ヲ取扱フ警察官ヲ防グ爲ニ設ケタル立柵ヲ除キ罪ニ之ヲ總稱スルナリ

若シ其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ツト請フトキハ之ヲ許ス

第十五條　在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載スルモノヲ除キ修身又ハ營業ニ必要ナルモノヽミヲ許スヘシ

第十六條　已決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ記載シタル者ヲ別異ス

一十六歲未滿ノ者ト滿十六歲以上ノ者

二滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年齡ニシテ初犯ノ者

三初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條　要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着シ其番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル每ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿チ其犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ

及ビ遞傳方相違ス
書候處ノ今日迄別冊通知ノ如ク囚人ニ賦ノ船利ヲ失フト雖モ其法律ニ
ソ在獄人既ニ天
タルモノニテ凡
人ニ諭シ遞傳ス
改正シ本年施行
月ヨリ一日ヨリ
行ヒ候ハ從前遂
中矛盾ノ廢止ハ
同日限リ廢止ハ
此旨相遂候
事
囚人諭送手續
第一條 甲ハ乙ヨリ丙ヘ囚人ヲ送ル場合ニ於テ遞傳書ヲ所持シ沿路ノ監獄ニ諭シ送ル囚人ハ其里數ヲ以テ距離ノ遠近ニ從ヒ其日數ヲ定メ之ヲ諭ス

○第九條 ハ典獄ノ者ヲ長トシ監獄ノ職務ヲ掌ル官吏ヲ置ク

第二條 ハ囚人ヲ送ル場合ニ於テ其罪狀及ビ犯人ノ人物ヲ詳ニシ諭令ヲ以テ其罪狀ニ據リ致スヲ要ス

第三條 ハ囚人ヲ送ル場合ニ於テ其罪狀ニ據リ致スヲ要ス

第四條 ハ囚人ヲ送ル場合ニ於テ其罪狀ニ據リ致スヲ要ス

身タルヲ鞫探スルヲ得サラシム

第十八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其尊屬親ヨリ願出ルトキハ第二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ」矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者ノ年齢ハ滿八歲以上滿二十歲以下ヲ限リトス

第十九條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一刑法第七十九條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年ノ者及ヒ瘖啞者

二尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者

第二十條 前條第二款ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ證票ヲ具スルニ非レハ入場ヲ許サス但シ在場ノ時間ハ六個月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス

入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舍ニ帶往セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ

第二十一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス

○第十條 ハ官吏ト雖モ恣ニ人民ヲ拘束シ監禁セズト云フヲ可ラズ本條ハ此ノ要ヒナキタメ未決已決ヲ問ハス入監スル者アレハ其入監スヘキノ證據即チ拘引狀以下ノ令狀又ハ處刑宣告書其被告人ヲ受取リタル證ヲ引致者ニ渡スナリ

第十一條 ハ乳呑兒アル婦女入監スルトキハ其ノ身養育ニ放レ躰ノ屏弱ヲ前途ニ來スヲ以テ止ワ得スト本條ヲ設ケ特ニ三歲未滿者ノミ之ヲ許セ

一十六歲未滿ノ者ト滿十六歲以上ノ者

二滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト

同上ノ年齢ニシテ初テ入場スル者

第二十二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領置ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知會スヘシ

在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス

第二十三條 典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄サシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第二十四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞罰簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ褫奪シタルトキハ之ヲ刪除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ四徒ニ示スハ第二十六條ノ例ニ依ルヘシ

第二十五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ內務卿ニ申報

警吏及縄取ノ人員ハ適宜タルヘシ

第五條　逃亡ハ遞傳護送ヨリ日出没マテ

第六條　警察官吏分署ニ於テ本人ノ逮捕シ書式ニ照ラシ要領ヲ記載シ且房内ニ於テ裸躰トナシ惣身及所持ノ刑名罪見込又ハ犯罪ノ要領及若ハ記載シ置クヘシ

第七條　囚人ハ沿道警察官ニ宿泊セシメ若シ沿道警察官ニ宿泊セシメス

第八條　囚人病疫ニ罹リ長ニ照会シ該地戸長ハ適宜取締ヲ定メ適宜取締ヲ為スヘシ

第九條　逃亡中囚人逃走スルトキ捕寄ツル者ハ之ヲ下付ス（ルヲ取）

○第十二條　警吏及縄取ノ人員ハ適宜タルヘシ

第五條　逃亡ハ遞傳護送ヨリ日出没マテ

第六條　警察官吏分署ニ於テ本人ノ逮捕シ書式ニ照ラシ要領ヲ記載シ且房内ニ於テ裸躰トナシ惣身及所持ノ刑名罪見込又ハ犯罪ノ要領及若ハ記載シ置クヘシ

第七條　囚人ハ沿道警察官ニ宿泊セシメ若シ沿道警察官ニ宿泊セシメス

第八條　囚人病疫ニ罹リ長ニ照会シ該地戸長ハ適宜取締ヲ定メ適宜取締ヲ為スヘシ

第九條　逃亡中囚人逃走スルトキ捕寄ツル者ハ之ヲ下付ス（ルヲ取）

○第十二條　新ニ入監ノ者アルトキハ十條ノ規則ノ外ニ尚ホ本條ノ規則ヲ守リ末尾ニアル姓名帳ノ

注意ヨリスルモノナレハ今其ノ豫防ヲ為スタメ此條ヲ設ク

○第十四條　入監人ノ携帯シタル金錢及衣服等其他悪ク物品ハ賄検シ其員数ト其名號ヲ簿冊ニ記載シ典獄ハ一々證印シテ之ヲ領置シ而シテ出獄ノ時之ヲ還付スルナリ物件ハ隠匿シ後チ發覚シタルモノハ之レヲ官ニ没收スルナリ第二項ハ第一項ノ財貨物件ヲシテ親族ヲ扶助シ或ハ自分ノ正當ノ入用ニ供セント請フアレハ宜シク之レヲ許スナリ之レ其瓦心ヲ慰ス

第十二條　典獄ハ入監人ノ携帯シタル金錢及衣服等ノ用ニ供スヘキ物件ヲ夾帯スル○ハ拒クヘシ

第十三條　監獄ノ房中ニ入ルヽ處ノ物品ハ典獄一々之ヲ厳密ニ験視シ批越自殺等ノ危険ノ用ニ足ヘキモノハ一切之ヲ厳禁シ入ルヲ許サヽルナリ破獄等ノアルハ多ク監房ニ入ルヽ物品ノ不

スヘシ

第二十六條　特赦ヲ受ケタル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ掲示スヘシ

第二十七條　假出獄ヲ許サレタル者ニハ其證票ヲ與ヘ警察遞傳ヲ以テ其居住セントスル地ニ押送スヘシ

第二十八條　假出獄者ニ携帯セシメス其金圓ヲ錄監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ携帯セシメス其金圓ヲ錄シテ共ニ其地ノ警察官（治罪法第六十條第二項ニ記載シタル官吏）ニ送致スヘシ

第二十九條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工召喚スルヿヲ得

第三十條　刑期滿限ノ後願ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヿヲ得

第三十一條　刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期翌日午前第十時ヲ過ヘカラス

第三十二條　死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ厳ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

第三十三條　刑死者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニ在ラス

第三十四條　典獄ハ入監人ノ携帯シタル金錢及衣服等其他悪ク物品ハ賄検シ其員数ト其名號ヲ簿冊ニ記載シ典獄ハ一々證印シテ之ヲ領置シ而シテ出獄ノ時之ヲ還付スルナリ物件ハ隠匿シ後チ發覚シタルモノハ之レヲ官ニ没收スルナリ第二項ハ第一項ノ財貨物件ヲシテ親族ヲ扶助シ或ハ自分ノ正當ノ入用ニ供セント請フアレハ宜シク之レヲ許スナリ之レ其瓦心ヲ慰ス

第三十五條　傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スルヿヲ許サス

第三十二條　死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ厳ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

第三十三條　刑死者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニ在ラス

シ速ニ手續ヲ了シ難キ場合ハ最寄警察本分署ノ助力ヲ請フヿヲ得

第十條　遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以テ支辨スヘシ但編取ノ履給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費用中ニテ支辨スヘシ

第十一條　第一條ニ掲クル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年第十七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ル𪜈ハ沿

○第十五條ハ在監人ノ書籍ヲ讀ント請ニ依リ之ヲ許スヿヲ定メリ而メ新聞紙雜誌ノ時事ヲ論說セシ書ハ故アリ許サヽルハ在監人ハ世事ヲ評論シ時態ヲ知ル可キ者ニアラス只修身學ニ係ル書籍ハ特ニ改過遷善ノ心ヲ發起ス爲メ許セリ

○第十六條ハ已決囚タリ各刑名ニ從テ其監房ヲ區別セリ卽チ禁錮懲役拘留等ノ別ニシテ懲役場拘留場ニ入ルノ類ナリ又其中ニ就テ尙ホ一二三項ノ如ク年齡ニヨルト初犯再犯以上ニヨルトヲ區別スルナリ

親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但送費ハ親屬ノ自辨トス

若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ沒收ス

第三十四條　在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照シテ處分スヘシ

第三十五條　監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ

水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ遑ナキトキハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得

第三章　監獄ノ構造

道府縣ノ仕拂ニ立テ其他ハ發出府縣ノ監獄費ヨリ仕拂フベシ

第十二條　第二條ニ掲クル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方警察費ヲ以テ支辨スベシ

第十三條　護送囚人死沒ノ引取人ナキモ其所持金錢物品（埋葬費ニ足ルモノ）アル者及陸軍下士卒海軍下士卒ノ埋葬費ハ第十一條第十二條支辨ノ限ニアラス尤其費額ハ都テ拾圓以内タルヘシ但下士卒ノ分ハ追テ陸軍省海軍省ヨ

○第十七條ハ要犯トハ共犯罪者ノ類ヲ判スルニ當リ檢問シテ證左ヲ執ルニ便ナル者或ハ之ヲ敎訓辨解セハ其實ヲ得易キノ狀アル者ヲ云フ

○第十八條ハ放恣不貞ニメ品行方正ナラサル者ヲ矯正シ善良ニ歸セシメント欲シ父母並兄弟姉妹等ヨリ懲治場ニ入レンヿヲ請願スル𪜈ハ第二十條ニ照シ入場ヲ許スヘシ之レ犯罪ヲ豫防スル一大要旨ニメ其入場ヲ許スハ滿八歲以上二十歲以下トス

○第十九條ハ懲治入ト附スルモノハ卽チ第一項刑法第七十九條八歲以上ノモノ情狀ニヨ

第三十六條　留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ毎府縣ニ置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス

留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ一區畫内ニ在ルモノハ牆壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第三十七條　未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴劃スヘシ

甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交通スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同シクシ甲乙適用スルヲ要ス

第三十八條　密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラシムヘシ

闇室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

密室闇室ハ一室一人ヲ限トス

第三十九條　接見室ハ監舍ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ

リ各自ニ拂戻スベシ

第十四條　遞送ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テ都テ拘留人ノ例ニ依ルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿ニ賄臥具料燈手數料ヲ合セテ金二十五錢以下食錢金七錢以下藥價診察料等ハ實費支辨スベシ

○沖繩縣人民徒流刑處分方

明治十六年一月第四號達

沖繩縣人民ニ限リ徒刑流刑ニ處セラレタルモノハ同縣下八重山島ニ發配スルヲ得ヘシ此旨相達候事

リ十六歳未滿ニ過ギザル時間第八十二條ノ齋濫者罪ヲ犯シ不論罪ニ處スル後猶其情狀ニ因リ五年ヲ過ギザル時間留置スル者及第二項尊屬親ノ請願ニ因テ矯正歸善ノタメ入場セシムルモノ

○第二十條ハ懲治場入場ノ手續及ヒ年期ヲ定メタリ第二項ハ會テ入場ヲ情願セシモノ懲治人ノ行狀ヲ試ムル爲メ自宅ニ連レ歸ラント請フトキハ其情狀ニ依リ之ヲ許スヘシ

○第廿一條ハ懲治人ノ居房ヲ區別スルモノニシテ事異ナリト雖第十六條ノ款ト同シ

○第廿二條

口ヲ開キ之ニ縦横ノ格子ヲ嵌メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシムヘシ但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第四十條　燈火ハ監房外ニ置キ障碍スルノ虞ナカラシムヘシ

第四十一條　死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第二編

第一章　役法附時限

第四十二條　定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ毎囚一日ノ科程ヲ定メテ服役セシム滿十二歳以上十六歳未滿ノ者滿六十歳以上及ヒ病後ノ疲勞若クハ身体ノ虚弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體力ニ應シ作業ノ科程ヲ寛恕ス」若シ已ムヲ得ス外役ニ服セシムル時ハ鐵鎖ヲ用テ

但囚人取扱方ハ舊慣ニ因リ沖繩縣令之ヲ管理スベシ

○明治十六年七月司法省丙第四號達

監倉若クハ獄倉ニ在ル被告人ヘ送達スヘキ總テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署ヘ送達ノ手續ヲ囑託シ該署ニ於テハ規則ニ從ヒ本人ニ送達シ令狀ハ其正本其他ハ送達謄本ノ一本ヲ裁判所ヘ返還スヘキ樣取計ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令內訓本文ニ抵觸スル條件ハ渾テ取消候事

○明治十七年七月內務省乙第三十號達

今般各假留監設置セラレ候

ハ在監人ヲ他監ニ移ストキ其ノ在監人ノ名籍ト又ハ處刑ノ言渡書其他必用ノ文書ト入場ノ節領置セシ貨物及賞罰ヲ告命セシ文案錄等ヲ送致スヘキナリ第二項ハ押送スル途中ハ戒具ヲ用ユルト否トノ區別男女ヲ別ツヲ云フ

○第廿四條ハ善行等ニテ之ニ賞表ヲ與ヘ帳簿ニ其ノ氏名ト賞與ノ詞ヲ記載シ賞表ヲ取上ゲタルトキハ簿册ヲ刪除スヘシ但シ賞罰ヲ行ヒタル旨ハ第二十六條ノ例ニ依リ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシム

○第廿五條ハ刑法第六十四

二囚毎ニ聯絆シ笠ヲ用テ晴雨ヲ問ハス其面ヲ掩ハシム但外役ノ囚徒ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム

外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサラシムルヲ要ス

第四十三條　毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ看守點検ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦同シ

第四十四條　左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者モ亦一日免役ス

一月一日

一月二日

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

ニ付徒刑流刑及ビ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及ヒ聯合地方ノ區分左ノ通相定候條此旨相達候事

一 徒刑流刑禁獄送致方

徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判確定セシ時ハ之ヲ管束セシ地方ヨリ警察遞傳ヲ以テ直ニ其聯合假留監ヘ押送スヘシ

但本監ノ都合ニヨリ典獄ヨリ其聯合地方ヘ囚徒押送ノ延期ヲ通知スルヿアルヘシ

聯合地方廳分

一 兵庫假留監

京都府 大坂府 兵庫

條ニ註解スル如ク特赦アリタルドハ之ヲ內務卿ニ申報シ其果メ數諭ノ行屆キタルヤ否ヲ詳撿スヘキナリ

○第廿六條 ハ特赦ヲ受ケタル者アレハ其者ノ免役ヲ得ル日又ハ日曜日ノ午後他ノ衆囚徒ヲ召集シ其行狀方正悛改ノ狀ニ依リ恩典ヲ蒙リタル事ヲ聽カシメ仍ホ監內尤モ見認メ易キ場所ニ揭示スルナリ

○第廿七條 ハ獄則ヲ謹守シ悛改ノ狀ヲ著ス者ハ刑法第五十三條第一項第二項ニ從ヒ假出獄ヲ許サレタル者ニハ其證票ヲ與ヘ警察ノ遞傳ヲ以テ其住居セン

春季皇靈祭
神武天皇祭
秋季皇靈祭
神嘗祭
天長節
新嘗祭
十二月三十一日

第四十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業手等ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授クルヲ要ス

第四十六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖ヒ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セント請フニ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル

未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキモ亦同シ

縣 滋賀縣 石川縣 富山縣 福井縣 島根縣 鳥取縣 岡山縣 廣島縣 山口縣 和歌山縣 德島縣 高知縣 愛媛縣

一 東京假留監

警視廳 神奈川縣 埼玉縣 群馬縣 千葉縣 茨城縣 栃木縣 三重縣 愛知縣 靜岡縣 山梨縣 岐阜縣 長野縣

一 宮城假留監

新潟縣 福島縣 宮城縣 岩手縣 青森縣 秋田縣 山形縣

一 三池假留監

長崎縣 福岡縣 大分縣 佐賀縣 熊本縣 宮崎縣 麑島縣

トスル地ニ押致スヘシ

第二項最初入監ノ際監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ與ヘスシテ其金員ヲ錄シテ居住セントスル地ノ警察官ニ送致ス警察官トハ警視、警部、區長、郡長、警部アラサル地ノ戶長ヲ云フ

○第廿八條 ハ本條ノ如キ即チ徒刑流刑ノ囚徒ニシテ假出獄又免幽閉ヲ受ケタル場合ニ於テ其ノ者ノ營業ハ典獄ヨリ其方法ヲ指示シ其來署ヲ要シ召喚スルハ特赦ノ勸告スル日又ハ教誨ノ講席等ナリ

○第廿九條 ハ監獄中行狀正シク能ク獄則ヲ

第四十七條 懲治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時ニ過キサル時間休憩時間ヲ除農業若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

○時限

第四十八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル已決囚ハ毎日日出ノ頃ニ起床シ各々其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以內監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四十九條 定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ午飯セシム其起床ヨリ約ネ一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前十時前後ニ至テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日沒前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

○明治十七年八月内務省乙第三十一號達

今般各所ニ假監ニ相成候徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑囚ハ府縣ニ處セラレタル者ハ直ニ監獄ヘ送致可相達候ニ付テハ府縣ニ於テ監獄ヲ設ケ官吏ヨリ在監人ニ命令スルヿハ勿論ヘシ

守ル者ヲシテ傳告者勝工者ノ二者ヲ設ケ官吏ヨリ在監人ニ命令スルヿハ勿論ヘシ

第五十條　科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ハラス罷役セシム

午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ若シ偷懶ニシテ怠役スルモノハ飯後休憩ヲ許ルサス

第二章　工錢

第五十一條　定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ科定シ之ヲ十分シ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決者ニ在ル者並ニ第十九條第一項ニ記載シタル懲治人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ當日ノ科程ヲ畢リテ仍ホ作業スルモノ科程外ノ工錢モ亦タ同シ

第五十二條　第十九條第二項ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ハ其工錢ノ全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルヿ能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

○明治十五年内務省乙第十四號達

監獄則第五十一條ニ重罪輕罪ノ囚徒ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

○明治十八年内務省乙第三十五號達

第五十一條ニ依リ新舊比照シテ其執行中門戸ヲ鎖ラシムルハ死刑執行ノ妨碍ヲ防クカ爲ナリ

○第卅二條　死刑ノ執行及ヒ死後ノ處分ヲ定メタル者ニシテ其執行ノ期ヲ過クヘカラスト云フ

○第卅一條　死刑ノ執行ハ其執行ノ期ヲ過クヘカラスト云フ

第十時ヲ過クヘカラスト云フ

故ニ其日ノ午前

○第卅一條　死刑執行ノ妨碍ヲ防クカ爲ナリ

○第卅二條　死刑ニ處セラレタル者ハ疾病死亡者アルトキハ其執行並ニ死亡セシ年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ監獄署近地ノ親屬等ニ通知スヘシ

○明治十九年内務省乙第十號達

監獄則第五十條ニ重罪輕罪ノ囚徒ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十二條　第十九條第二項ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ハ其工錢ノ全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルヿ能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五十三條　在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

前ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十四條　各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干錢ト定ムヘシ

第五十五條　監署ニ留置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヿヲ得

第五十六條　在監人死亡シ監署ニ留置ノ工錢アルトキハ第三十三條ノ例ニ照ラシテ處分スヘシ

第五十七條　在監人若シ逃走シタルトキハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬ナケレハ之ヲ沒收ス

第三章　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押

旨相達候事但新舊比照

○明治十五年内務省乙第十四號達

監獄則第五十一條ニ重罪輕罪ノ囚徒ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

○明治十八年内務省乙第三十五號達

監獄則第五十一條ニ依リ新舊比照シテ其執行中門戸ヲ鎖ラシムルハ死刑執行ノ妨碍ヲ防クカ爲ナリ

○第卅二條　死刑ニ處セラレタル者ハ疾病死亡者アルトキハ其執行並ニ死亡セシ年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ監獄署近地ノ親屬等ニ通知スヘシ

○明治十九年内務省乙第十號達

監獄則第五十條ニ重罪輕罪ノ囚徒ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十二條　第十九條第二項ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ハ其工錢ノ全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルヿ能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五十三條　在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

前ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十四條　各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干錢ト定ムヘシ

第五十五條　監署ニ留置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヿヲ得

第五十六條　在監人死亡シ監署ニ留置ノ工錢アルトキハ第三十三條ノ例ニ照ラシテ處分スヘシ

第五十七條　在監人若シ逃走シタルトキハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬ナケレハ之ヲ沒收ス

第三章　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押

監獄ニ拘禁ノ書ハ十七年當省乙第三十號達ニ準シ直ニ假留監ヘ押送スヘシ

レハ領置ノ貨物ハ之ヲ下付スヘシ之ヲ受クヘキモノナケレハ逃走ノ日ヨリ滿一ケ年ノ後ニ官ニ没收セリ

○第卅五條　第一項ハ監獄ノ近境ヨリ火災起リ獄外ニ迫リ終ニ監獄類燒スルニ當リ其防クヘカラサル者ト認ムルトキハ司獄官吏ハ在監人ヲ他ノ監獄又ハ官衙寺院等ニ押送シ其災ニ罹ラサル樣注意スヘシ是レ其ノ罪ヲ惡ンテ其人ヲ惡ムニ非サル所以ナリ

第二項ハ前項ト異ナリ洪水大火大風地震其他激甚ナル變災ニ際會シ抗拒スヘカラサル場合ニメ

送

第五十八條　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者アルトキハ其宣告書ノ謄書ヲ具シテ內務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押送スヘキモノトス

第五十九條　北海道ニ在テ集治監ハ毎歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シタル徒刑流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

第六十條　徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚トヲ別ツヘシ遞船中ニ在テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ケナシ

第四章　假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舍

第六十一條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其地ニ居住スヘキ家ナキトキハ屋舍ヲ貸與スヘシ

在監人ヲ他所ヘ押送スルノ暇ナキ時ハ要犯疑獄ヲ除クノ外一般解放スルヲ得ルナリ

○第卅六條　ハ留置場監倉（以上未決監）拘留場（徵役場（以上已決監））ハ每府縣ニ設置シ其場所ハ適宜定メシメ集治監ハ其地ヲ豫定セス時ノ機樣ニ依リ之ヲ適宜ノ地ニ設ク東京集治監、櫪戸集治監ノ類是ナリ第二項ハ集治監ノ外五監同一區畫內ナルトキハ之ニ墻壁ヲ以テ區別シ互ニ伺フヲ得サラシム

○第卅七條　ハ各監舍ヲ區劃シ男女ノ別ヲ嚴屋舍ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ創置スルノ便ヲ計畫スルヲ要ス

第六十二條　假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キ同居セント請フトキハ典獄將來營生ノ方法ヲ取糺シ之ヲ許否スヘシ

前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地ノ戶長ニ通告ス可シ

其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ典獄之ヲ許否スヘシ

第三編

第一章　給與

第六十三條　已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス

第六十四條　未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣

ニセサルヘカラス然ラサレハ實ニ害ヲ生セリ

○第卅八條　密室ハ治罪法第百四十三條ニ從ヒ專實ノ獲見ノ爲メ設ケタル室ニシテ之ヲ監倉內ニ設ケ囚獄官吏ノ外他人ト接見スルヲ許サス閉室ハ第百三條第四ナル懲罰ノ者ニカヽレハ則チ已決監內ニ設置スル者ニメ已決監ノ獄則ヲ犯シタルモノヲ入ルヽ室ナリ

○第卅九條　第三篇第四章ナル在監人ガ親屬又ハ已ムヲ得ザル人ニ接見スル場合ノ其接見室ノ造リ方ト接見ノ方法トヲ示シタル者ニシテ

類ヲ自辨スルヿ能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第六十五條　已決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色トス

第六十六條　獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ

第六十七條　在監人ニ貸與スル衣類雜具

通常服

一單衣
一袷
一綿入衣
一襦袢

就役服

一單短衣
一袷短衣
一綿入短衣
一襦袢
一股引
一雜具
一蒲團
一蚊帳
一枕
一帶　長三尺
一褌　長三尺
一手巾
一簑
一笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澣濯補綴シテ其用ニ充ルヲ得

接見ノ如斯ク爲サヽレハ未決者ニ在テハ證據湮滅又ハ密ニ在テハ脫逃ノ方策ヲ圖謀スルニ至ル故ニ官吏申間ニ立並ヒ立會ノ上面晤セシム但懲治人ニ於テハ此例ヲ用ヒス監署又ハ看守所等ニ於テ接見セシム

○第四十條　ハ燈火ヲ監房外ニ置キ近ツケサルハ不虞ノ妨碍ヲ防クナリ

○第四十一條　ハ死刑場ノ位置ヲ示セリ且ツ外見ヲ防クハ始ハ非惡ノ念ヲ斷ツモ終ニハ之レカ習慣ト爲リ反ツテ惡念ヲ增スノ

媒ト爲レハ之レヲ陰ニ行ナリ

第一章役法ハ在監人ノ科程ヲ定メテ服役セシムル者及ヒ之レニ服セサルモノヲ取糺スノ規範ナリ

○第四十二條　刑名ノ輕重ニ從テ斟酌シ一人毎ニ一日ノ作業ヲ定メテ之ヲ勞勦セシム尚ホ滿十二歲以上十六歲未滿ノ者ト滿六十歲以上ノ者トノ老幼者ト又病後ノ羸勞者トハ其體力相應ノ作業ヲ爲サシム若シ已ムヲ得ス外役ニ服セシムル時ハ鐵鎖ヲ用ヒテ二人毎ニ聯絆セシム之レ囚徒ノ逃走ヲ防キ又晴雨ヲ問ハス笠ヲ用テ其面ヲ掩ハシムルハ恥心ヲ存養セシメシカ爲メナリ其外役ノ囚徒ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲメ之レヲ看守セシムルナリ

○第四十三條　毎日囚徒ヲ役ニ就カシムルニ際シ之ヲ監房外ニ整列セシメ以テ其數員及ヒ就役服ヲ著スルノ外他物ヲ帶ヒサルヤ否ヲ檢査スヘシ又醫監時モ亦同シ

○第四十四條　ハ本條ハ服役ヲ免スヘキノ日ヲ規定セリ元始祭

第六十八條　在監人一人一日ノ食糧

一下白米十分ノ四　七合　强キ力業ニ服スル者

一摻割麥十分ノ六　五合　輕キ力業ニ服スル者

一同　四合　工役ニ服セサル者及ヒ滿十歲以上ノ未決者

一同　三合　十歲未滿ノ幼者

一菜　金壹錢五厘以下

地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルヿヲ得

第六十九條　工業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ其幾倍ヲ得ル者等ヘハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

第七十條　在監人日用ノ雜費滓粕薪炭又ハ炊用ノ薪炭其他一身ニ係ル日常諸費ハ一

人一日金一錢二厘以下トス

第七十一條　監房常置ノ器具

一貯水器幷ニ飲器　木製

一唾壺　同

一便器　木製大小二種但監房ニ厠圊ノ接續スル者ニハ此器ヲ用ヒス草ノ種類ヲ以テ製作セシ軟カナルモノ

一小箒

一洗手盆　木製

第七十二條　浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎ニ一次十月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス

第七十三條　已決囚及ヒ懲治人ノ髮ハ常ニ之ヲ短薙シ髭鬚アル者ハ常ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラス

婦女ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サス

第七十四條　衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澣ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘカラス

等時日ハ略シテ註セス

○第四十五條　服役ノ囚徒ニハ事業ヲ作サシメサルヘカラズ故ニ監獄ニハ別テ授業手ヲ習キ員タ短期ノ囚徒ハ刑期中習熟シ易キ工業ヲ授クルヲ要ス

○第四十六條　ハ流刑、禁獄、輕禁獄等ノ定役ニ服セサル囚徒ト雖モ何等ノ業ヲモ爲サズメ徒ニ光陰ヲ費スハ刑期滿限後ノ生計ヲ失フニ至ル故ニ典獄之ヲ勸誘シ解放ノ後一生業ヲ計ル等ノ爲メ自カラ思慰ヲ起シ勞動ノ作業ニ就カシムルニ至ラシムヘシ若シ請ヒタル時ハ其作業ノ種類ハ典獄ノ指示ニ依リ敢テ囚徒ノ望ム所ニ從ハザルナリ

○第四十七條　ハ懲治人ハ素ト品行放恣ニシテ不良ナルモノ等ヲ矯正醇善セシムルニアリ故ニ教誨ニ充ルガ爲メト監内ニ於テ農業又ハ工藝ヲ教ヘ以テ力作セシムルナリ時間ハ一日ニ七時間ヲ過ギサルヨウ教誨ヲ主トシテ力作ヲナサシムルモノトス

○第四十八條　ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十九條　死者ノ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル時限ヨリ二十四時以内ニ在テ遺骸ノ下付ヲ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシテ簿冊ニ署名押印又タ花押セシムヘシ遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ其標ハ約チ面三寸長三尺五寸トス

第三章　書信

第八十條　已決囚其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ六個月間ニ一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス但シ其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又タハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏ニ於テ法律ニ觸ルヽコトナク且必用ト認タルトキハ此限ニ在ラス

第八十一條　未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八十二條　懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル信

第二章　疾病附死亡

第七十五條　在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム

懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七十六條　病者ノ攝養ニ効アリ飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七十七條　傳染病侵蔓ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ愼密ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診斷書ヲ副ヘ各其所屬長官ニ報告スヘシ

○死亡

第七十八條　在監人死亡スレハ典獄看守長醫師幷莅テ之ヲ驗屍スヘシ

未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡

シ斯ノ如ク嚴密ニ爲スハ之レ在監人ノ惰怠ヲ警戒シ風習ヲ矯正セシムルナリ

○第四十九條　ハ定役ニ服スルモノハ起床、就役、休憩、還房、罷役等ノ時間ヲ定メラルト雖モ實際ニ當リテハ其ノ辭酌ヲ以テ時間ヲ伸縮スルヿヲ得ルモ又勞作ノ適度ヲ失ハサランヿヲ認レテ也

○第五十條　ハ科程ハ一日ノ作業何程ト規定シ定時間内ニ之レヲ終ラサルヘカラス然カルニ技能ノ巧拙ニヨリ其ノ作業大ニ遲速アルヘシ半日或ハ半日暇ニ終リタルモノハ罷役セシム然レモ性惰怠ト遲鈍ニシテ半日ノ作業ニ當リ米タ一日ニ當リ午飯ニ就ク科程ノ大半ヲ爲シ得サルモノハ飯後ノ休憩ヲ許サス

○第五十一條　ハ工錢ヲ與フニ百日ノ現役ヲ經サレハ之レヲ付與セサルハ貧困者若シ衣食住ノ三策盡キ將サニ饑餓ニ迫ントスルニ當リ刑期百日以下ノ罪ヲ犯シテ曾テ監獄ニ入リテ其衣食住ヲ仰キ且役ニ就キテ工錢ヲ得ントスル惡策ヲ爲スヿ如キ此世ノ大害ヲ生シ法律ノ効ヲ爲ス能ハス故ニ

書ハ一個月一次トシテ一通ニ過ルコトヲ得ス

第八十三條　在監人ノ發スル信書ハ典獄之ヲ檢閲スヘシ若シ書中忌諱ニ渉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サス

第八十四條　外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル信書ハ典獄之ヲ檢閲シ適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限リ之ヲ本人ニ付與ス若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セス

第八十五條　信書ヲ檢閲スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ横讀シ嫌疑ノ文意アリヤ否ヲ詳査スヘシ

第八十六條　在監人ヨリ發スル信書ハ必ス信書紙ヲ用ヒメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便税ハ自辨セシムヘシ

第四章　接見

第八十七條　在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄先ツ之ニ面接シ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其縁由ヲ詳悉シ已ムヲ得サルノ事狀アリテ形跡ノ疑フヘキヿナキトキハ之ヲ許シ看守長看守並莅テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ズ若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條　死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分時ヲ過ルヲ得ス

第五章　差入品

第八十九條　未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又ハ飲食物炊烹ヲ要セサルモノニシテ一人一食ノ量ニ限ル贈ラント請フトキハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノ

現ニ役スル百日ニ至ラサレハ工錢ヲ與ヘサル所以ナリ

○第五十二條　ハ雖親即チ父母兄弟等ノ情願ニ依テ懲治場ニ入タルモノ衣食ノ費用ヲ其尊屬親ヨリ自辨スルモノハ工錢ハ全ク之ヲ與フ自辨スル能ハサルモノト又刑期後頼ルヘキ所ナキモノト監獄署内ノ刑室ニ留置シ作業爲シ居ルモノハ其工錢ヨリ衣食ノ費用ヲ相除シ其餘分ヲ與フ之皆刑人ニ非サレハナリ

○第五十三條　ハ在監人ノ得タル所ノ工錢ハ皆監署ニ領置シ本人ノ隨意ニ費ヒ拂フヿ能ハザルモノトス況ンヤ工錢ノ如キハ積シテ在監人ヲ益スルモノナレハ在監人ニ與フヘキ工錢モ決シテ本人ニ渡スヿナク故ニ之ヲ領置シ而メ放免ノ日之ヲ下與シ生業ノ資本トシム

○第五十四條　ハ工錢ノ額ヲ定ムルハ技能ニヨリ世間普通ノ工錢ニ比セズンバアラズ故ニ在監人ガ其ノ長所ニヨリテ工作スル所ノ工錢ノ額ハ監署ノ地ノ普通傭賃錢ヲ準トシテ之レヲ定ムルヿトス

第四編

第一章　教誨

第九十條　已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第九十一條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ金錢衣服家具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第九十二條　已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第九十三條　教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開クモノトス

第九十四條　懲治人ニハ毎日二三時間讀書習字算術度量圖畫等ノ科目中ニ就キテ之ヲ教フヘキモノトス

學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ハ此限ニ在ラス

ノ良否氏名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閲官吏ノ撿閲ニ供シ又其尊屬親ニ示スヿアルヘシ

第九十五條　各監房内ニ左ノ諸欵ヲ掲示シ傍訓釋義シテ解易カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

掲示

一在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ

一平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ愼テ容止ヲ正フスヘシ（未決監ニハ此欵ヲ除ク）

一毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ

一毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及ヒ席壁圖則等ヲ掃除スヘシ

一窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ヘ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス

一監外ニ出タル時其途上ニ於テ仝往ノ者ト交談シ及ヒ手

○第五十五條

ハ工錢ハ監署ニ預リ置クト雖モ其ノ活用ヲ止メテ死物ト爲スニハ非ス故ニ本人ノ請ニ由リ親屬ヲ救助ノ爲メ貸與センコトヲ欲シ又ハ第十五條ニ依リ書籍等ヲ購ヒ度旨ナレハ之レヲ許セリ又ハ第六十九條ノ特別法ニ從ヒ食品ヲ購買シ之ヲ給與スルコトヲ得ルナリ

○第五十六條

ハ在監人死亡シ工錢ノ處分法ニシテ別ニ深意ナシ

○第五十七條

ハ已決囚若シ逃走シタルトキハ直ニ縛ニ就クモ其工錢ハ之ヲ没收ス未決者及ヒ懲治人ハ即チ處刑人ニアラス然ルヲ以テ逃走シタルトキハ其親屬ニ下付スヘシ親屬ナケレハ之ヲ没收セリ

○第五十八條

ハ集治監ハ內務卿ノ直轄ニシテ囚徒ノ多寡等ハ詳知アルヲ故重罪懲役ヲ除クノ外刑ニ處セラレタル者アルトキハ內務卿ニ申報シ內務卿ノ指揮ニヨリ所ヲ定メタル地ニ送ルトス且ツ警察廳ヲ以テスルハ其沿道熟知ノ人ナルヲ以テ費用ヲ省クニ便ナレハナリ

ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス

一夜間ハ最モ鎭靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起歩スルヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス

一許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戲ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルガ如キ所爲アルヲ禁ス

一服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ス 未決監ニハ此款ヲ除ク

一許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス

一監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一日沒後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ報スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ

一病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其看病人タラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ

一水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時內ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ擧ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分スヘキモノナリ

年　月　日　　某監獄署

第二章　賞譽

第九十六條　已決囚獄則ヲ謹守シ且改悛ノ行爲著キモノト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第九十七條　賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖肩臂間ニ方二寸曲尺ノ淺葱色ノ布ヲ縫着スヘ

○第五十九條　ハ内地ニアル集治監ト北海道ニアル集治監トニ押送スヘキ方法ハ前條第一二項ニ於テ之ヲ定メタリ本條ハ其押送シ來リタル囚徒ヲ受取リノ爲メ派出セシムル規定ヲ設ケ一ケ年三四度ニ纏メテ本監官吏ノ出張シタル地マデ其出張官吏ニ引キ渡スモノトス是レ其費用ヲ省ケリ

○第六十條　ハ囚徒押送ノ際暴行又ハ逃走ヲ防ク爲メ戒具ヲ用フヘシ亦男女ノ囚ヲ分別スルハ亦理ノ當然タリ而テ北海道ヘ押送スル船中ニシ

第九十八條　賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト爲スヲ得

第九十九條　賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信スルヲ許ス

第百條　已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金貳拾五錢以下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ食物ヲ購求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニアラス

第百一條　未決監ニ在ル者前條ノ勞働アルトキハ之ヲ錄シテ檢察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第百二條　懲治人第百條ニ適シタル勞働アルトキハ金貳拾五錢以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

第三章　懲罰

在テハ敢テ戒具ヲ用ヒサルモ防ケナシ

○第六十一條　ハ假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノモノハ其ノ島地ニ居住セシムルヿトスレ其ノ地ニ居住スヘキ家屋ナク且傭工錢アルモ一家經營スルノ費ニ不足スル等其多キニ居ル故ニ集治監近傍ニ一家ヲ貸與シ栖居セシム而シテ其貸與スル屋舍ヲ樵造スル二當リテハ將來市街ヲ爲シ村落トナルノ便ヲ得ル如クセラルヘハ大ニ開地ノ主旨ニヨリタルモノナリ

○第六十二條　已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從フテ處罰ス

一絶信　親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス

二屏禁　晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス

三減食　常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ糝湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

四闇室　闇室ニ入レ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ糝湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

第百四條　絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食闇室ハ七晝夜ヲ限トス

減食闇室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第百五條　懲治人及ヒ十六歲未滿ノ已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ改罰ス

條

ハ假出獄免幽閉ヲ受ケタル囚徒其配偶者卽チ男ハ妻女ハ夫ヲ招キ又ハ其親屬卽チ父母子孫兄弟等ヲ招キ同居セントト請フモノハ典獄ニ於テ果シテ一家經營ノ道ヲ立ツルヤ否ヲ取糺シ那來營業產業ノ方法アリト見認ムルトキハ其請ヲ許シ否ヲサレハ許サス

○第六十三條

ハ已決囚ノ獄衣ハ源テ自分ノ衣類ヲ着スルヿヲ許サス又第六十五條第六十六條ニ從ヒ同製ノモノトナシ之ヲ貸與スル然ラサレハ其欲ニ從ヒ富貴ハ之ヲ喪リ貧賤ハ困ス如斯クナレハ惡モ刑罰ノ効ナキナリ

○第六十四條

ハ未決者ハ未タ囚徒ノ名ヲ下ス能ハス故ニ衣類ハ絹木綿等適宜ニ自辨セシメ敢テ之ヲ咎メス若シ臥具モ自辨セント請フモノハ之ヲ許ス

○第六十五條

ハ在監人ノ服色ヲ定メ使役或ハ捕縛ニ便ス又淺葱色ハ我國下等社會ノ服ナレハ斯ク區別スルモノカ

○第六十六條

ハ獄衣ノ製法ヲ定ムルナリ

○第六十七

一獨慎（ドクシン）晝夜一室（ドクキヨ）ニ獨居セシム

二減食（ゲンシヨク）常食ノ半以內ヲ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラス

獨慎（ドクシン）ハ七晝夜以內減食（ゲンシヨク）ハ三日以內トス

第百六條　獨慎（ドクシン）ハ七晝夜以內減食（ゲンシヨク）ハ三日以內トス

第百七條　未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者敎令ニ順ハス或ハ同監（ドウカン）ノ者ヲ煽惑（センワク）シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第百三條第百五條ニ準擬シ減食スルヿヲ得

第百八條　賞表（シヤウヒヤウ）ヲ有スル者處罰（シヨバツ）ヲ受タルトキハ賞表一個又ハ數個ヲ褫奪（チダツ）ス

第百九條　無期徒刑（ムキトケイ）ノ囚徒逃走シ若クハ獄舍獄具ヲ毀壞（キクワイ）シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下兩脚（リヤウキヤク）又ハ一脚ニ釬（ツラヌ）ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其釬（ツラヌ）ニ貫キ腰間（エウカン）ニ繚帶（レウタイ）セシメ繚帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例（レイ）ニ照（ナラ）シテ處罰（シヨバツ）ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者（ヒバツシヤ）ノ體力（タイリヨク）ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス其外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯袢（レンハン）ノ法ニ從フ

第百十條　減食（ゲンシヨク）或ハ閤室（ハンシツ）ノ罰（バツ）ニ處スヘキモノアルトキハ醫師ナシテ診視セシメ身體ニ妨ケナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ

第百十一條　屏禁（ヘイキン）減食閤室又ハ獨慎（ドクシン）ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若クハ看守長（カンシユチヤウ）時々其動靜ヲ窺察（キサツ）シ狀況（シヤウキヤウ）ニ由リ醫師及ヒ敎誨師ヲシテ之ヲ問ハシムルコトアルヘシ

第百十二條　罰則（バツソク）ニ處セラレタル者改悛（カイシユン）ノ狀著（アラハ）ルヽトキハ之ヲ免スルコトヲ得

第百十三條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ違背（イハイ）シタルトキハ七日已下之ヲ拘留（カウナ）スルコトヲ得

〔典獄（檢印）〕　懲治人名籍　主檢　書記　〔氏名印〕

條　貸與スル所ニ在監人ノ物品ニシテ地方ノ寒暖ニ依リ料酌シ一樣ナル能ハズ其破損汚穢シタル時ハ之ヲ辭退シ又ハ補綴シテ用フ之レ一ハ衛生上ト費用ヲ省クタメナリ

○第六十八條　在監人ノ食糧ハ定メ身躰ノ强弱年齢坐食ノ者ト力食ノ者等ニ依リ其食スル自カラ異ナリ又タ之レカ稻米ノミヲ食セシムルトキハ却ツテ貧民ノ貧困者ヨリ且法律上懲罰ノ効用ヲ失フカ故也又麥粟稗又ハ黍芋薯等ヲ代用スルモ好シトス其地方ノ便宜ニ依リ適宜之レヲ取捨スヘシ

○第六十九條　ハ一日ノ食糧ハ前條ノ如ク定ムト雖モ工業ニ勉勵シテ前條ニ掲クル費用及ヒ第七十條ニ記スル費用ヲ償ヒタルモノ又ハ工錢二倍以上ヲ得ルモノ等ハ本人ノ請ニ由リ別置シタル工錢ヲ以テ價三錢ニ過キサル食物ヲ購ヒ與ヘリ之レ工業ニ勉勵心ヲ起サシムル所以ニシテ定限ナケレハ自由ニ美食シ却テ弊戒ノ意ニ反シ他日出監ノ際資力ヲ失ヒ在監人ノ心思ヲ我儘ニ移ラシメサルト冗物ヲ食メ却テ健康ヲ害

本管出生地族籍氏名年齡　國郡村町番地住何某男弟女妹　何國郡町村產族籍　何某　年月日生　當何年何月何年何ヶ月

懲治人及ヒ尊親屬ノ營業　懲治人ノ營業主願者タル尊屬親ノ營業

親屬　父母兄弟及ヒ配偶者等ノ有無

入場ノ年月日　明治何年月日午前後第何時入場

入場ノ事狀

身材　長何尺何寸何分肥瘠强弱

容貌音聲　面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑（アバタ）、瘊子（イボコブ）、癭瘤（ホクロ）、黑痣（ナベブ）、癩風（アザ）、天鯨、

教育及ヒ宗門　創癩（ハンセイ）ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス　入場ノ時文字ヲシルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス」入場後進學ノ景況何宗或ハ宗門不詳

入場中ノ賞罰　明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ

書信贈答ノ月日　何年何月日國郡町村住親屬若クハ朋友ニ書信發來

懲治場ニ留置ノ宣告ヲナセシ裁判所　明治何年何月何日某裁判所ニ於テ若干月日留置ノ宣告

曩ニ處斷ヲ經シ者ナル時ハ其事由　犯由ノ大略及ヒ某裁判所

事變　明治何年月日病死或ハ變死或ハ逃走或ハ他監ニ移ス

放還　明治何年月日某家ニ放還

〔典獄〔檢印〕〕　未決囚名籍　主檢　書記　〔氏名印〕

スルトヲ豫防スルトノ故ナリ

○第七十條　在監人日常ノ雜費金ハ割註ノ辭濫等ノ爲メ給與スルヲ定ム

○第七十一條　ハ監房定置ノ器具ヲ定メリ且右ノ器具ヲ皆木製ニシテ竹籠或ハ陶器ヲ用ヒス之レ硬堅質ノ物ヲ製スルトキハ或ハ破獄毀打自殺等ノ妨ケアレハ之レカ恐レヲ避クル爲メナリ

○第七十二條　ハ氣候寒暑ニ依リ入浴ノ度ヲ定メ即暑中ハ度ヲ多シ寒中ハ度ヲ少クス身躰ノ健康ヲ保ツ所以ナリ

○第七十三條　在監人ノ頭髮ノ事ヲ定メ外間人ト同ク爲サシメサルハ之レ懲戒ノ主意ニ戻ルヲ以テ也

○第七十四條　在監人ノ健康ヲ保護スル爲メ衣類等其種質ニ由リ時々熱湯ヲ以テ之ヲ洗ヒ清メ臭氣ヲ除去シ蝨虱其他ノ蟲害ヲ防クヲ要セリ且病者ノ物品ト混一ニシテ之ヲ洗フヘカラス之ヲ一層注意シ疾病臭氣蟲害ノ傳染ヲ防ク爲メナリ

○第七十五

本籍出生地	某管下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女族籍
氏名	何
年齡	某年月日生 當何年何月何年何ヶ月
營業及ヒ親屬	營業ヲ詳記ス可シ父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無
乳兒提携	男或ハ女收監ノ時何歲何ヶ月
入監ノ年月日時及ヒ罪件	明治何年月日午前第何時入監何罪ヲ犯ス
身材	長何尺何寸何分肥瘠強弱
容貌音聲	面體眉毛目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘢子、癰瘡、黑痣、瘢風、天鯨、創瘢ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス
教育及ヒ宗門	文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳

入監中ノ賞罰	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ
書信ノ贈答ヲ許ス月日	明治何年月日何國郡町村住親屬若クハ朋友ニ書信發來
當該官吏ノ氏名	裁判長ノ名死刑ハ裁判長ノ外其行刑ヲ臨監セシ官吏ノ氏名
保釋付責	明治何年月日保釋若クハ責付
事變	明治何年月日病死或ハ變死脫監
終結	明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行又ハ他監押送
〔典獄(檢印)〕已決囚名籍	主檢書記〔氏名印〕
本籍出生地	某管下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女族籍
氏名	何
年齡	某

條 其罪ヲ處分シテ刑ニ適シ監ニアル者ト雖モ其人ヲ惡ムニ非ス又タ處刑外ノ苦ニ罹ラシムヘキ者ニアラス故ニ若シ疾病ニ罹レハ監署ニ屬セル醫師ヲシテ病狀ヲ診斷セシメ其輕重ニ依リ監房又ハ病室ニ於テ療治セシムヘシ療治人ハ親屬ヨリ情願ニヨリテハ親屬ニ交付シテ療法セシム而シテ塩内療養ハ其費用ヲ自辦セシムルナリ本項得ノ字ヲ以テ許否典獄ノ裁酌ニ有ルヲ示ス

○第七十六

條 在監人ト雖モ疾病ニ罹レハ其ノ病者ヲ大切ニセサルヘカラス故ニ醫師ノ如シ前條ノ證明ニヨリ病者ノ掘養ニ効アル飲食物又ハ監房内ニ火ヲ入ルヲ禁スルヲ以テ病者ノ爲メ温ヲ取ル湯薬等ヲ要スルトキハ典獄之ヲ考檢シ以テ詳否ス

○第七十七

條 傳染病侵襲スルノ兆アレハ其消毒且豫防ヲ慎密ニセサルヘカラサルハ勿論況ンヤ囚徒ニシテ粗食シ空氣ノ流通其宜キヲ得サルモノニ於テヽヤ若シ在監人中傳染病者アルトキハ醫師ヲシテ直チニ病性等ヲ詳悉シ診斷書ヲ副ヘ各所屬長官ニ報告ス

氏名 年齢	某年月日生 當何年何月何年何ケ月
營業及ヒ親屬	營業ヲ詳記ス可シ父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無
乳提携兒	男若クハ女收監ノ時何歳何ケ月父母ニ先テ出監シ或ハ死去シタルトキハ之ヲ詳記ス
刑名及ヒ宣告ノ月日裁判所ノ名稱	何刑若干年月日明治何年月日何裁判所ニ於テ宣告
收監ノ年月日	明治何年月日午前後第何時入監
犯由ノ大略及ヒ犯數	財産ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大略ヲ記ス若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ某裁判所ニ於テ何刑ニ處セラル
身材	長何尺何寸何分肥瘠强弱
容貌音聲	面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑（アバタ）、瘊子（イボ）、瘻瘤（コブ）、黑痣（ナベヤケ）、癜風（アザ）、天鯨（キツネ）、創瘡ノ類及ヒ音聲ノ高低（ホガラ）ヲモ細緻ニ具載ス

教育及ヒ宗門	文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳
入監中ノ賞罰	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ
書信贈答ノ年月日	明治何年月日何國郡村町住親屬若クハ朋友信書發來
假出獄免幽閉	明治何年何月何日假出獄或ハ免幽閉
事變	明治何年月日病死或ハ變死或ハ脫監或ハ何罪ヲ犯シ復タ未決監ニ入ル
終結	明治何年月日滿期放免又ハ赦特

假出獄之證票

某縣下國郡村町番地住又ハ何某子弟妻女

族籍

何

某

某年月日生

○第七十八條　在監人死亡スレハ典獄醫師等之ヲ檢屍スヘシ之レ病死又ハ變死ナルヤヲ檢スル也

○第七十九條　死者ノ親屬若クハ故舊通報ヲ受ケ第卅三條中記スル處ノ時刻ヨリ二十四時以内ニ在テ遺骸ノ下付ヲ請フ時ハ之ヲ許シ其受取人ヲメ簿册ニ署名押印セシムルモノ能ハザル時ハ花押セシムルナリ

○第八十條　ハ書信ノ手續ヲ定メ一次一通トナスハ監獄等不眞ノ謀ヲ爲スヲ慮レリ然レ𪜈裁判所行政廳等ノ訊問ニ由テ必ス書信ヲ要ストキカ又ハ親屬故舊ニ依リ必ス之レカ回答ヲナサヽルヲ得ハ親屬故舊ニ於テ害ヲ醸生スルヲ得ハ司獄官吏ニ於テ之ヲ檢査シ之ヲ許セリ

○第八十一條　ハ治罪法第百四十條ノ第二項第三篇第三章豫審第一節令狀ノ中書檢書錯其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經ルニ非サレハ被告人ト外人トノ之ヲ授受スルヲ許サズトアリテ檢査ヲ經ス澄リニ通信ヲ許ストキハ證據ヲ湮滅シ實ニ法網ヲ免カレシメ社會ノ害ヲ生スルヲ慮レリ然レ𪜈裁判所行政廳等ノ訊問ニ由テ必ス書信ヲ要ストキカ又ハ親屬故舊ニ依リ必ス之レカ回答ヲナサヽルヲ得ハ親屬故舊ニ於テ害ヲ醸生スルヲ得ハ司獄官吏ニ於テ之ヲ檢査シ之ヲ許セリ

身材
名籍ノ樣本ニ倣ヒ詳記スヘシ
容貌
上ニ仝シ
罪質犯數
刑名刑期
及ヒ附加刑
年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受ケ年月日ヨリ執行何年何月日滿期

明治何年何月何年何ケ月

一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居住スヘキ何地ヘ約ヲ何日迄ニ到着シテ即其時地ノ警察官ニ屆出テ此證書ヲ納メタル上住宅ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事

一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレタル事

一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スヿアルトキハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレサル事

一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滯留スルトキハ滯留地ノ警察官ヨリ其變書ヲ受ケ居住地ニ到着ノ上此證書ト共ニ居住地ノ警察官ニ差出スヘキ旨申渡シタル事

右之通心得サセ假出獄ノ證票ヲ與フル者也

明治　年　月　日　　某監獄署
　　長官何某　印

○假出獄ヲ受タル者所有金アルトキハ其證票ノ裏面若クハ欄内ニ左ノ二款ヲ附記スヘシ

一此者ノ所有金ハ當監署ヨリ其居住スヘキ地ノ警察官ニ送リ遣シタル事

一警察官ヘ送リ遣シタル金圓ハ此居住地ニ到着ノ後何日ニテモ受取得ヘキト雖𪜈同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上ニ非レハ一次ニ之ヲ渡サヽルヘキ事

會ニ向テ大ナル害ヲ來タスモ計リ難シ故ニ豫審判事等ノ檢閲ヲ經テ差支ナキ者ハ之ヲ許スヘシ

○第八十二條

幼年ノ已決囚ハ他ノ丁年者ト異ナリテ親屬モ其思慮スル所ニ乏シ故ニ毎月確慎ノ狀ヲ親屬等ニ報告シ且安否ヲ尋問スルヲ得然レ𪜈規定ニ過クヘカラス

○第八十三條

在監人ハ在監人ヲ憑テ之ヲ憑フヘカラス概シテ之ヲ恐意ノ人ト云フ可キナリ故ニ其ノ發スル信書ノ何ニ拘ラ

何	管	下	某	監	獄	署	○	在
	一在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ 一信書ノ文句規則ニ背キタルヿアルトキハ其送致ヲ止メ仍ホ相當ノ罰ニ處スルヿアルヘシ							

スル一々之カ精密ニ檢閲スヘシ若書中怠慢即チ脱獄陰謀等ヲ企ツルノ語氣アレハ其通信ヲ許サス

○第八十四條

外人ヨリ在監人ヲ吹嘘ノ情ヲ妨ケ不良ノ念ヲ生セシムル等ノ文意アルトキハ之レヲ付與セス若シ檢閲スルニ當リ適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ論示ヲ主トシ管導セシムル者ト見認メタルトキハ之ヲ付與スルナリ

○第八十五條

在監人ヨリ贈ルト外人ヨリ贈ルトヲ論セス信書ヲ檢閲スルハ先其文ヲ直行順讀スル等

監人	書信紙	○明治	年	月	日

宜シク之カ詳審ヲナシ嫌疑ノ文意ナキヤヲ注意スヘシ

○第八十六條 ハ在監人ノ信書ハ已レ自ラ繙印スルヿ能ハズ又通帶ノ紙ニ書ス可ラズ監獄署ニ備ヘアル書信紙ニ認メサセ典獄之ヲ封皮ニ收メ其表面ニ受取人ノ住所氏名ヲ記シ裏面ニ監獄署ノ名ヲ記スヘシトナリ

○第八十七條 ハ外國人ヨリ在監人ニ接見ヲ請フトキ手續ヲ示セリ即チ本條最テ詳ナリ

○第八十八條 ハ死刑宣告ヲ受ケタルモノハ幽明ノ名殘ニ親屬故舊ニ接スルヿヲ許サレ又タ徒刑流禁獄囚ニシテ集治監ニ送ラルヽモノモ其出立ノ時マデニ接見スルヿヲ許スナリ

○第八十九條 ハ未決者及ヒ懲治人ハ眞ノ犯罪人トハ云フ可カラザルモノユヘ其ノ差入品ノ如キモ大ニ其區域ヲ廣クセリ故ニ其親屬等ヨリ諸物品ヲ差入度ク請フトキハ本文ノ明文ニ在ルカ如キト雖モ書籍ハ先ツ第十五條ニ記載スル者ノ如キハ之ヲ許シ其他用紙等ハ必要ナル者ノミ特ニ之ヲ許ス酒又ハ煙草ノ如キ揺生ニ害アリト見認ルモノハ之ヲ許サヽルナリ

○第九十 ハ已決囚ハ罪狀既ニ定マリ其刑ヲ執行シ懲戒中ナレハ書籍及ヒ日用欠クヘカラサル用紙ノミ之レヲ許スモ其他ハ一切之ヲ禁セリ

○第九十一條 ハ刑法附則第四十一條ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスルトキハ警察署ニ申請シ許可ヲ受ク可シトアリテ情狀改悛ニメ假出獄等ヲ受ケタル徒刑流獄ハ集治監所在近傍ニ於テ一家生計ヲ營マシムルハ恩典ノ處分タリ其際親屬等ヨリ金錢等ヲ寄贈シタルトキハ一々典獄ニ申告セシムヘシ然ラサレハ親屬ヲ欺ク等ノ弊ヲ生スレハナリ

○第九十二條 ハ既決囚及ヒ懲治人ヲ教誨スル爲メ其師ヲ聘シ以テ說教セシメ善良ノ人トナラシメントノ旨意ナリ

○第九十三條 ハ前條ニ云フ處ノ教誨師及ヒ僧侶等ヲ請ヒ悔過遷善ノ道ヲ講說セシムルモノ之ヲ日々ニ爲ストキハ就役ノ妨ゲトナル故ニ第四十四條ニ載セタル免役日又ハ曜日ヲ以テ教誨ノ講說ヲ開クヿトセラレタリ

○第九十四條 ハ懲治人ニハ毎日ニ四時間讀書算術等ノ科目ヲ定メコレニ就キ教ヘシム之レ工藝ノミニ長スト雖モ教誨ヲ被ラズ讀書等ヲ識ラサレハ善ニ遷ルノ感覺ヲ起サス終ニ惰弱ニ陷リ勞動ヲ忌ミ或ヒハ害ヲ世上ニ遺スニ至ル之レ本條ノ設ケ有ル所以ナリ

○第九十五條 ハ各監房ノ内ニハ其ノ教誨又ハ行儀ノ規則ヲ張出スナリ然ルニ文ヲ知ラザルモノ多キ故其文字ハ皆傍訓ヲ施シ釋義ヲ加ヘ之レカ解シ易カラシムルナリ若シ文字ヲ識ラサルモノアレハ監シタル時ヨリ二十四時内ニ之ヲ讀ミ聽カシムルナリ

○第九十六條 已決囚入監ノ後其監則ヲ謹守シ且ツ改悛ノ行著明ナルモノト認定スル時ハ之レヲ賞與スルナリ其賞與法ハ未タ官規ニアルニ非ラザルヲ以テ宜シク之レヲ實シ偏頗ノ處置ナキヲ務ムヘシ

○第九十七條 凡ソ賞與ナルモノハ其者ヲ奬勵シ其身ガ後日宥免ノ考據トナルモノニテ假出獄免幽閉特赦等ハ殊ニ考據タル

ベク他囚ヲシテ其心ヲ起サシムルノ法ナリ

○第九十八條 賞表假出獄等特赦ノ典獄ヨリ具狀スルハ一定ノ考據ヲ設ケサレハ或ハ文飾ニ流レ且過憐ニ失スルノ弊アリ故ニ本條ヲ設ケ該具狀スルノ日安ト

○第九十九條 ハ已決囚ノ親屬等ニ接見スル等ハ第八十條第八十七條ニ設ク如ク六個月ニ一次タリ然レトモ賞表ヲ得タルモノハ本條ノ如ク之レヲ特許シ其謹慎スルノ情ヲ親屬故舊ニ通報シ尚一層悛改シ益々善心ニ復ラシムルモノナリ

○第百條 前四條ハ已決囚カ獄則ヲ守リ改悛ノ狀ノ著シキモノヲ賞スル條項ニシテ已決囚平常ノ行狀ニカヽルモノナレトモ本條ノ場合ハ最モ賞與スト雖モ第九十七條ノ賞表ヲ與フルヿナキハ蓋シ或ヒハ同監人ト陰謀ヲ爲シ人命ヲ救助シタル躰ニ爲シ又ハ逃走者ヲ捕縛シタルニ擬シ萬一僥倖セントスルノ惡徒アルヲ以テ本條ヲ設ケ平常獄則ヲ謹守スルモノニ非ラサレハ決シテ一時ノ盡力ヲ以テ刑期ヲ減セサルナリ

○第百一條 未決者ニシテ非常ノ時ニ非常ノ勞働キアリタルトキハ夫レカ爲メ本刑ノ何分ヲ減スルヿナシトスベカラズ故ニ前條ノ勞働アルトキハ之レヲ錄取シ以テ檢察官及ヒ裁判官ニ申告シテ參考ニ供シ或ヒハ酌量減輕ノ助ケトナルヲ以テナリ

○第百二條 ハ懲治人モ非常ノ働キヲナサバ之ヲ賞スルニ已決囚ト同シク賞ス等ノ物品ヲ購求メ之ヲ與ヘ第三章ハ即チ懲罰ノ方法ルナリ去レトモ懲治人ニハ適宜物品即チ修身學ノ書籍或ハ用紙手本ヲ定メ在監人ヲ取締リ惡ヲ懲シ善ニ導クノ方タリ

○第百三條 ハ已決囚ニシテ監獄則ヲ犯シタルモノヲ罰スル條タリ其法四種アリ又輕重ニ依リ各異ニシテ第一項ヨリ第四項ニ說ク如シ故ニ一々解セス

○第百四條 ハ已決囚ノ獄則ヲ犯シタルモノヲ罰スルノ法ニシテ其罰名ノ期限ヲ示セリ其ノ第二項減食閉室ノ如キハ之ヲ長クスルトキハ必ズヤ人身ノ揺生ニ害アリ故ニ七晝夜ヲ以テ一旦之ヲ免シ尚ホ悛改ノ景狀ナキモノハ更ニ之ヲ科スルナリ

○第百五條 ハ懲治人及ヒ十六歲未滿ノ已決囚獄則ヲ犯シタル者ハ別ナク獨居セシメ第二項減食トハ依リ左ニ之レヲ說ク第一項獨慎トハ一室ニ晝夜ノ別ナク獨居セシメ第二項減食トハ前條ニ定ムル處ノ猶前條ト全シキモ稍輕シトス即チ食ノ半以内ヲ減スルモ禁ハ一般ト全シク之ヲ與フ

○第百六條 ハ前條ニ定ムル處ノ猶慎食減ノ期限ヲ定ムルナリ

○第百七條 ハ未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケタル僅々十日以下ノ如キ者ハ法律ニ之レヲ區別セズ其ノ年齡ニ依リ十六歲以上ナレバ第百三條ニ依リ十六歲未滿ナレバ第百五條ニ依リ食ヲ減スナリ

○第百八條 賞表ハ善行改悛ノ者ニ與フルモノニシテ既ニ一個又ハ數個ヲ與ヘタル囚ハ罰ヲ受ケタル時ハ其罰ノ輕重ニヨリテ前ノ賞表ヲ取消ス爲メ已ニ行フタル賞表ヲ褫奪スルヿ亦セリ

○第百九條 ハ重罪ノ已決囚徒

ヲ懲罰スルノ法及期限ヲ示セリ第二項ハ重罪ヲ犯シタルモノヽ懲罰期限ヲ示セリ第三項ハ前項ニ定ムル處ノ錢丸ノ輩等ヲ規定スルモノニシテ創チ其躰力相應ニ之ヲ施ス然レトモ服役ノ外役ナルトキハ鐐丸ヲ除キ二人聯伴ノ法ニ從フ之レ役スルハ便ナルト其逃走ヲ防グトニ依ルナリ　○第百十條　病者及ハ虛弱ナル者ニ處スルトキハ爲メニ病ヲ重カラシメ虛弱ニ至ラシムルユヘ本文ノ如ク注意ヲ加ヘリ　○第百十一條　ハ處罰セラレタル者ハ其罰ナキ者ニ比スレバ幾分ノ苦シミアレバ身躰ニ害ヲ及ボスト云フ可カラズ又其ノ罰ニ處セラレテ果シテ諱身ノ狀アルヤ否ヲ窺フ爲メ典獄又ハ看守長時々出動靜ヲ觀察シ其狀況ニ依リ醫師ヲシテ身躰ノ何如ヲ問ハシメ又ハ教誨師ヲシテ悔過ノ道ヲ說カシムルコトアルヘシ　○第百十二條　ハ第百三條第百五條第百七條第百九條ノ罰ニ處セラレタルモノハ之ヲ皆勸善懲惡ノ主意タリ故ニ改悛ノ狀著ルヽトキハ之ヲ免スヿ前條ニ同シ

監獄則終

明治廿一年十月廿七日印刷
明治廿一年十月廿九日出版

飜刻發行者　東京日本橋區通四丁目八番地　三井新次郎

印刷者　東京々橋區西紺屋町廿六番地　島連太郎

日本橋區橋町四丁目　鶴聲社
同　通四丁目　春陽堂
同　金櫻堂
同　横山町　辻岡文助
同　覺張榮三郎
同　浅草三好町　大川屋
同　馬喰町二丁目　山口藤兵衛

發賣書林